647-23ロ
1200701540795

新版茶話全集

上卷

新版 茶話全集

上卷

薄田泣菫著

創元社版

647
23ロ

I種
W

1200701540795

はしがき

本書は茶話といふ題目のもとに、大正五年の春から、三四年間、大阪毎日新聞紙上に掲載したものを、間もなく三卷に分けて出版し、その後新に起草したもの約一百篇を增補し二卷に分けて大正十三年大阪毎日新聞社より發行したものへ、更に程經て東京日日新聞や二三の雜誌に執筆したものを附け足して、ここに茶話全集上下二卷として創元社より上梓することになつた。東京日日に掲載以後のものは、拙著「猫の微笑」と「艸木蟲魚」に收められてゐたものだ。

茶話は雨の降る日、靜かな窓に凭れて、苦い茶を啜りながら、次から次へと頭に浮んで來るいろんな事象を、一つ一つ微笑をもつて迎へる著者の境地をそのまま書き綴つたもので、材料は內外の書物や外字雜誌から得たものもあり、また他から聞いたものもあるが、日日の新聞紙の讀物として起草した關係上、時日を隔てた今日になつて、それを讀み返す

と、當時と比べて大分感じや印象が違つて來る文字が少くない。例へば政友會内閣當時原敬氏に與へる積りで書いたものが幾篇かあるが、原氏が歿くなつた今日になつてみると、說法の相手が居なくなつたやうで、ちよつと變な氣持がしないこともない。然し讀者の誰彼がそれを讀んで、自分の事でも言はれてゐるやうに思つて、こつそり頭を掻く分には少しも差支ない。

茶話の執筆は、前後三四年にわたつてゐるし、その間著者の内生活にも動搖があつたので、ある篇と他の篇とでは、材料の取扱ひ方に大分違つたところがあるのは、讀者の誰もが氣づくことだらう。

この書の上梓について、前の茶話出版者、とりわけ大阪毎日新聞社から快諾を得たことを厚く感謝する。

著　者

目　次

燒肴は右か左か……三
油蟲嫌ひの皇帝……五
大食と少食……八
滑稽作家演說を盜まる……一一
主人の頭を打つ女……一四
一千圓の遺產處分……一六
獨身主義者と結婚……一九
雄辯家の親孝行……二三
裸體……二四
貧乏畫家……二七
音樂家と小說家……三〇
蓮のうてな……三三

文豪と旅宿の亭主……三五
毬を返せ……三七
五千弗の提琴……四〇
劇作家と舞臺監督……四二
文豪の原稿……四五
御寢間の埃……四六
時計……四八
牧師の惡妻……五一
短い大演說……五三
自動車王と子供……五五
獨逸帝國の豫言……五八
飯を安く食ふ法……六一
人間の大小……六四
婦人と多妻主義者……六六
下腹で猫が啼く……六八
珍しい廣告……七一

生命の勘定……七三
慈善家の心得……七六
落錢を拾ふ樂しみ……七八
胃の腑……八〇
獨帝の拳骨……八三
天國に結婚のない理由……八五
接吻か二十弗か……八七
十六人の女房……八九
俳諧師の頓智……九一
寄附金の請取……九四
骸骨の議員……九六
博士と小學生徒……九八
卵を一つ……一〇〇
十二種の新聞を讀む小僧……一〇二
氣取屋の婦人……一〇四
女形の心得……一〇七

目次

賣子娘……一〇九
詩人の健啖……一一三
詩人の握手……一一四
話題……一一六
五十仙の損失……一一八
文豪の娘……一二〇
運……一二三
音樂家の大統領……一二五
三弗で……一二八
馬の慈善……一三〇
英國首相の恐縮……一三三
牛の價……一三四
吝嗇の競爭……一三六
勞働者としての鼠……一三八
畫の接吻……一四〇
子供の少い村……一四一

目次

食事の流儀……一四四
農夫の自慢……一四六
何故食物が高い？……一四八
肉代五弗也……一五〇
愛國心の胃の腑……一五二
名文句……一五四
馬は美容に害あり……一五六
獨身主義者……一五八
梅の下かげ……一六〇
將軍の鼻……一六二
魚を食ふ人……一六五
婦人の病氣……一六八
鼠に嚙まれた英雄の心臟……一七〇
名女優の冷笑……一七二
バルザック……一七四
猫と四斗俵……一七六

喜捨金一文……一七八
喫煙禁止……一八一
滴水と峨山……一八四
豫言者……一八六
司令官と一兵卒……一八八
前大統領の嘘……一九〇
接吻……一九二
机……一九五
お水……一九七
奉納……一九九
醜女の家……二〇一
心得……二〇三
焼棒杭……二〇四
鰯……二〇六
死人の下駄……二〇八
高野の英靈塔……二一〇

蟲の聲……二一三
赤梅檀……二一五
隠し藝……二一八
大きな鼻……二二〇
唾……二二二
紋……二二三
男裝婦人……二二五
獨身儒家……二二七
明惠と雜炊……二三〇
栗鼠……二三三
廣告欄……二三四
記者へこまさる……二三五
男のお產……二三六
音樂家の頭……二三九
馬が悪い……二四一
手品師と蕃山……二四四

女の舌を……二四八
將軍の手紙……二四九
病氣必治法……二五一
小粒金……二五四
結婚と奴隷……二五六
相阿彌と鸚哥……二五九
喫煙家……二六一
出世の祕法……二六四
哲學者の寄附金……二六六
天神樣の子供衆……二六八
女優と監督……二七〇
華盛頓は死んでゐる……二七二
元帥の諧謔……二七五
ラムの祈禱……二七七
生き鬚……二七九
作り鬚……二八一

牡蠣を食ふ馬……二八三
尻と腹……二八五
魚の骨……二八八
三十六計……二九〇
長い紐……二九二
ほととぎす……二九三
天文學者……二九六
筍問答……二九七
審判の日……三〇〇
食べ方……三〇三
氣轉……三〇四
避暑法……三〇六
斜視……三〇八
親父の着物……三一〇
辯護士……三一二
黑人の盜み……三一四

歐陽詢と石碑……三一六
蛇……三一八
小說家の面會……三二〇
痘面の笑顏……三二三
怖い物……三二五
惡物食ひ……三二七
皮肉……三三〇
青磁の皿……三三二
獨帝の癖……三三四
猶太人と狗……三三五
馬の上から……三三七
演說の用意……三三九
靄山の娘……三四二
靜かな死……三四四
頤の外れたのを治す法……三四六
老畫家の音曲……三五〇

それ猫が……三五三
演說家の妻……三五五
しやれた料理……三五八
ナポレオンの人差指……三六一
佛國小說と米國……三六三
大雅と錦の袋……三六六
美術家と驛長……三六九
詩人を追出せ……三七二
芽張柳……三七四
奇癖……三七七
無學なお月樣……三八〇
詩人と百姓婆さん……三八二
蝮の失敗……三八五
王樣と上布……三八八
名挨拶二つ……三九〇
世界一の名醫……三九三

書肆と作家……三九五
夏蜜柑……三九七
器用な言葉の洒落……四〇一
當世批評家氣質……四〇五
大名の駄洒落……四〇八
宰相と馬鹿者……四一二
男と女との胸釦の相違……四一五
自分の葬式を自分の歌で……四一八
滑稽作家の諧謔……四一〇
小話數則……四一三
子供……四一五
黒い運轉手と……四一六
禪僧と靴……四一九
寄附金……四二二
大阪の道路……四二五
フオッシュ將軍と葉卷……四三八

黴菌を嚥んだ化學者……四四〇
首を繋ぐ法……四四三
名醫後藤新平男……四四五
タフトと葉子……四四七
俘虜紹介狀……四五〇
大臣の顔觸……四五二
結婚祝ひ……四五五
原敬氏と鯛の盆……四五八
新發明書物消毒法……四六一
三人牧師……四六三
鼻糞……四六六
敵と踊る……四六八
顯微鏡の寄附……四七〇
愕堂の日本料理談……四七三
停車場の演說……四七五
花嫁を忘れる……四七七

子役の粗忽……四八〇
人相見……四八三
桃の實……四八五
仲麿と背中合せ……四八八
幸運兒……四九一
船醉……四九二
美人の木乃伊……四九五
老人の忠告……四九七
煙草屋の小僧……四九九
豚に脱帽す……五〇二
悟道……五〇四
入場料の儉約……五〇六
座頭と花形俳優……五〇八
女商人……五一一
女房の手紙……五一三
女房の通辯……五一六

百圓札……五一八
お祖母様と黑猩々……五一一
婦人記者……五一三
三哩の言語……五一六
林檎の寃罪……五一八
名香大内山……五二〇
各國元首の收入……五二三
木堂と湖南……五二四
戀病ひ……五二七
苦力と料理人……五二九

新版 茶話全集

上

燒肴は右か左か

「金は篠(しの)
詩は三本木
書は貫名
學は猪飼に
粹は文吉」

とは、儒者中島棕隱が自分の友達の特長を謳つたもので、篠は篠崎小竹、三本木は賴山陽、貫名は海屋、猪飼は敬所、文吉といふのは言ふまでもなく棕隱自身の事である。

粹は文吉と言つただけに、棕隱はなかなかの洒落者であつた。ある時知合の家へ訪ねて行くと、ちやうど山陽もそこに來合はせてゐて、時分どきだといふので、晝飯の馳走にあづか

燒肴は右か左か

らうとしてゐるところだつた。剽輕で、無遠慮で通つてゐた棕隱は、平氣で座に上つて行つた。

折角の客なので、主人は棕隱にも膳を出した。棕隱はじろりと横目で自分の膳と山陽のとを見比べてゐたが、つい大變な事を見つけ出した。それは燒肴が山陽の方は大きくて、自分のは小さいといふ事であつた。

「いかん、いかん。いくら後客にしても、魚の小さいのは、あまり氣持がいいものではないて。」棕隱は肚の中でかう思ひながら、何食はぬ顏で杯を手に取つた。

暫くすると、棕隱はいつに似ず眞面目な調子で山陽に話し出した。

「君、つかん事を訊くやうだが、姑蘇城外の蘇の字だがね、あれは艸冠の下の魚と禾とは、どつちに書いた方がほんたうだつたかな。」

「蘇の字かい、あれは魚が右にあらうと、左にあらうと同じだよ。」

山陽は事によつたら魚の字など逆とんぼになつてゐたつて構はないやうな調子で答へた。

「さうかなあ。」棕隱は疊の上に指先でわざわざ字を書いて見た。「魚は右にあつても、左にあつても構はないんだつたかな。」

「さうさ。なんだつてまたそんな事を訊くんだい。」

「實はかうしたいからなんだ。」棕隱は矢庭に箸でもつて山陽の燒肴と自分のとを取換へた。

「ね、魚は右にあつたつて、左にあつたつて一向差支ないんだらう。」

「これは失敗(しま)つた。ははは。」山陽は聲を立てて笑つた。

吾が愛する賴山陽と世上の物識りとに敎へる。魚は右にあらうが、左にあらうが、早く箸を下した方が一番いいのである。

油蟲嫌ひの皇帝

油蟲といへば、蟲のなかでも一番いやな奴で、誰だつてあんな蟲を好くものはないはずだが、嫌ひなうちにも一番あの蟲が嫌ひだつたのは、ほかでもない露西亞のピイタア大帝であ

つた。

誰にしても好き嫌ひはあるもので、ゲエテは無駄話家が嫌ひだつた。ショペンハウエルは女が嫌ひだつた。スウイフトは戸を締めない人が嫌ひだつた。さういふ變つた毛嫌ひに比べると、ピイタア大帝が油蟲を嫌つたのは、別段驚く程の事ではなかつた。

だが、實を言ふと、露西亞には――とりわけ露西亞の田舍には油蟲が多いので、大帝が旅行でもする折には、お側の衆の氣苦勞は一通りではなかつた。何故といつて、大帝は他の家へ入る時には室を綺麗に掃除させた上で、

「御覽の通り油蟲は一匹もをりませんでございます。」

といふ家來の保證がなかつたら、夢にも閾を跨がうとはしなかつたから。

ある日の事、大帝は自分のお氣に入りの家來の別莊へお成りになつた。家來は大帝のお成りを喜んで、室を綺麗に飾りつけた上、色々の獻上物など竝べ立てて置いたが、それがひどく氣に入つて、大帝はいつにない上機嫌の態で食卓についた。

舌觸りのいい肉汁を啜りさして、大帝はひよいと顏を持ち上げた。そして側にゐた別莊の

主人に呼びかけた。

「ちよつと訊いておきたいが、この別莊には無論油蟲などゐる筈はなからうね。」

家來は油蟲と聞いたので、またいつもの癖が始まつたなと思つた。

「はい、油蟲などゐる筈はございません。とりわけ掃除には氣をつけてをりますので。」

「うむ。それは結構だ。」大帝はまた肉汁を啜り出さうとしたが、やつぱり氣になつてならないと見えて、も一度駄目を押した。「ほんたうに一匹もゐなからうな。」

「はい。」家來は叮嚀に頭を下げた。「よしんばをりましたところで、決してお目通りへ出て來るやうな事はございません。御覽遊ばせ。あれ、あのやうに生きた奴を一匹針で壁にとめて蟲よけの蠱(まじな)ひが致してございますから。」

「なに、生きた奴が針で突き刺してある。」

大帝は彈き飛ばされたやうに椅子から飛び上つた。そして主人の指ざす方へ眼をやると、それは丁度自分の頭の上で、留針で刺された油蟲はぴくぴく手足を動かせてゐた。大帝の顏は茱つ葉のやうに青くなつた。

「この禿頭めが……」

大帝はいきなり主人の頭に拳骨を一つ喰はして、そのまま外へ飛び出した。あとに殘された主人は壁の油蟲のやうに椅子の上で矢鱈に手足をもがいてゐた。

大食と少食

廣瀨淡窓は人も知つてゐるやうに豐後日田の儒者であつた。ある時、養子の青邨が淡窓に訊いたことがあつた。

「父上、ちよつと伺ひますが、禮は何から始めたものでございませうな。」

「禮か。」淡窓はちやんと坐つた膝がしらを養子の方へ捩ぢ向けた。「禮は無遠慮から始めるのだね。」

青邨は肚のなかで養父の語を味はつてみたが、今一つはつきりと意味が解せなかつた。で

また異つた事を訊いた。

「父上、今一つ伺ひますが、養生の極意はどこにございますでせう。」

「養生の極意か。」淡窓は直ぐに返事をした。「何より先づ大食ひをするんだな。」

青邨はいくらか調弄はれたやうな氣味で下つて行つた。

その後青邨は廣瀨旭莊に出合つた。旭莊は淡窓の弟で、青邨にとつては義理のある叔父だつた。甥はまた同じ事を訊いた。

「叔父上、ちよつと伺ひますが、禮は何から始めたものでございませうな。」

旭莊は直ぐに返辭をした。

「禮かい。禮なら先づ遠慮から始めるんだね。」

青邨はいつだつたかの淡窓の答を思ひ出して、どうにも合點がいかないらしかつた。で、立續けに今一つの質問を投げ出した。

「叔父上、ついでに伺ひますが、養生の極意はどこにございますでせう。」

旭莊は譯もなく答へた。

「養生の極意は食をひかへる事さ。」

青邨はもう我慢が出來なかつた。一方が無遠慮だと言へば、一方は遠慮だと答へるし、一方は大食ひだと答へれば、一方は食をひかへるのだと言ふ。吃度親父と叔父貴とが馴れ合つて自分を調弄つてゐるのか、さもなければ、二人とも何も知らない食ひぬけの大馬鹿者に相違ないと思つた。で、いくらか冷かし氣味に理由を話して訊いてみた。

「こんなわけでございますが、父上の御返事と叔父上のと、どちらが眞實なのでございませう。」

「どちらも眞實だ。」

旭莊はきつと甥の顏を見つめて言つた。その言葉によると、兄の淡窓は身體が弱く、食が細いので、始終遠慮勝と少食の損を知つてゐる。それとは打つて變つて、自分は健康で、いつも無遠慮と過食とから後悔する事が少くない。かうして互ひに自分達の弱みを知つてゐるから、それを汝に繰返させまいとするからのことだといふのだ。

道德や人生觀は多くの場合胃に繫がつてゐるものだ。それが胃病だと一層つよい。

滑稽作家演說を盜まる

マアク・トエンといへば、米國切つての滑稽作家で、この人の著作は日本でも方々の學校の教科書に使はれてゐ、また飜譯もかなりたくさん出來てゐる。この滑稽作家が或る時政治家のデピユウと同じ船に乘つて英國へ渡つたことがあつた。デピユウは一八六六年ごろ駐日公使として日本にも來たことのある人で、紐育埠頭の自由の像の除幕式には、わざわざ選ばれて素晴しい演說をしたこともあるし、また自分の演說集をも出版してゐるしするから、饒舌家の多い米國の政治家仲間でも、演說のうまいのと諧謔好きとで聞えた男である。この二人の評判男が乘り合はせてゐるといふことは、船出の初めから乘客達の噂になつてゐたが、船が海へ乘り出して一兩日すると、この二人を招んで一つ話でも聽かうぢやないかといふ相談が持ち上つた。

會は直ぐに開かれた。滑稽作家と雄辯な政治家とは主賓として招かれた。主人側の肝煎り役が言葉叮嚀に二人の卓上演說を促すと、マアク・トエンはやをら立ち上つて、持前の皮肉や諧謔を取交ぜて二十分ばかりしやべつた。演說は素晴しい出來だつた。皆は手を拍つて笑ひ崩れた。そして口にこそ出さないが、こんな感興の後では、デビユウ氏のやうな場馴れた演說家でも、さぞやりにくいに相違あるまいと思つた。デビユウは立ち上つた。

「御主人役を初め淑女紳士諸君……」この演說家は落着き拂つた態度で口を開いた。「今日お招きにあづかつてこの席に參りまする少し前、私とマアク・トエン君とは一つお互ひに演說の取換へつこをしてやつてみようぢやないかと申合せを致しました。唯今マアク・トエン君が申上げましたのが、紛れもない私の演說でございますが、それに對して皆樣から過分な御拍手をいただいて、私身に餘る光榮だと存じてをります。さてこれからお聞きに達しますのが、實は名譽ある文學者マアク・トエン君の演說なのでございます……」

かう言つて、デビユウは演說の草稿を取出さうとするらしく、ポケツトへ手をやつたが、急にあわてたやうな素振りを見せた。

「甚だ粗忽千萬な次第で、申上げにくいわけでございますが、實はマアク・トエン君からいただいてゐた演說の草稿をこの隱しに入れたまま、つい紛失してしまひましたので、この場合何一つ申上げることの出來ないのは、皆樣に對しても、また友人に對しても甚だ申譯のないことでございます。」

かう結んで、この雄辯家は腰を下した。皆は一度にどつと笑ひ崩れた。滑稽作家はその場の模樣を見て呆氣に取られて、目をぱちくりさせてゐた。

次の日マアク・トエンが甲板を歩いてゐると、一人の英國人がつかつかと近寄つて來た。その人は昨夜の席で一番大きな聲で噴き出してゐた男だつた。

「先生、昨夜はお氣の毒でしたな。」その男はこの滑稽作家をいたはるやうに言つた。「ですが、評判と事實とは違ふもので、私はあのデビユウさんがえらい雄辯家だとはかねがね聞いてゐましたが、先生のなすつたあの人の演說を聞いてすつかり失望してしまひました。奴さん、よつぽどここが悪いやうですね。」

かう言つて、その英國人は太い指で自分の頭をさして見せた。それを見てマアク・トエン

は厭世家のやうに悲しさうな顔をした。そしてまたしても眼ばかりぱちくりさせてゐた。

主人の頭を打つ女

むかしは男は月代（さかやき）といふものを剃つたものだが、それは髭を剃る以上に面倒くさいもので あつた。伊勢の桑名に松平定綱といふ殿様があつた。氣むづかしやで、思ふ存分我儘を振舞つたものだが、とりわけ月代を剃るのが嫌ひであつた。

「我君、だいぶお頭（つむ）が伸びましたやうでございますが……」

家來がかう言つてそれとなく催促しても、殿様は餘程氣輕な時でないと、滅多に月代を剃らうとは言ひ出さなかつた。やつと口説き落して、家來が剃刀を持つて後に立つと、氣むづかしやの殿様は螻蛄（けら）のやうに頭を振つてどうしても剃らさうとしなかつた。

「我君、お危うございます。」

と剃刀を持つたまま泣き出しさうに家來が言ふと、殿様はなほ調子に乘つて頭を振立てた。

「俺の頭はこんなにぐらぐらするのが癖だからの。」

と終ひには、家來が粗忽をして、家來にとつて餘り大事でない殿様の頭によく傷をつけたものだ。すると、氣儘な殿様は、主人の頭に傷をつけた不屈者だといつて、すぐに立ち上りざま手打にしたものだ。

かうした理由で、家來の幾人かが手打にせられたので、終ひには誰一人月代を剃らうと言ひ出す家來はなくなつた。で、殿様の頭は荒野のやうに髪が伸び放題に伸びた。

殿様の頭が、だんだんむさくろしくなるのを見た奥方は、譯を聞いて初めて驚いた。そしてその次の日には、奥方自身殿様の月代を剃らうと言ひ出した。殿様はその日も螻蛄のやうに頭を振つた。まさか剃刀傷をつけたと言つて、奥方を手打にする氣はなかつたらうが、この頭は剃刀の前には、ぐらぐらしないではゐられなかつたのだ。

奥方はそれを見ると、矢庭に拳をふり上げて、二つ三つ殿様の頭を敲きつけた。まるで締めの弛んだ古釘を打ち直しでもするやうに。殿様はびつくりした。

「何をする。」

「何も致しません、あなたのお悪いお癖を直したいばつかりでございます。」

奥方はそれを機に、殿をたしなめた。殿は默つて言ふなりになつた。

女にも色々ある。貧乏人の女房になるものは、頭を敲きつけられる辛抱が必要だが、富豪や大名の奥方になるものは、時々主人の頭を敲きつける程の氣力がなくて叶はぬ。

一千圓の遺産處分

土耳其であつた話である。あすこの或る信心深い富豪が大病にかかつて死にかけたので、一人息子を枕もとに呼んで、遺産の始末を細々と話した。

「で、お前に殘してやるものは、それで判つたらうが、ここにまだざつと千圓ばかり殘つてゐる金がある。」

病人は苦しさうな息づかひをしながら言つた。

「はい、ございます。いかが始末したものでございませうな。この金は。」

孝行者の息子は、いつその事この千圓は親父が墓場へ持つて行つてはどんなものかと言ひたいらしい考へを持つてゐた。

「それについてお前に賴みがあるのだが――」病人は破れた風琴のやうに悲しさうにまた咳き入つた。「その千圓は世界中でお前が一番賤しいと思ふ人間に與れてやつてほしいのだ。」

「承知致しました、きつとさやう取計らひます。」

孝行息子は今更のやうに親父の慈悲深いのに感心して、鼻をつまらせながら返辭をした。

病人が亡くなつて後、息子は裁判所へ行つて遺産相續をしたが、その折自分のために色々面倒な手續をしてくれた裁判官の顏を見ると、急に例の千圓の事を思ひ出した。

「さうだ、あの千圓をこの男に與れてやらう。相手は裁判官だ。また後々の都合もあることだから。」孝行息子は親父の遺言によつて、遺産のうち千圓を裁判官に贈呈したいと言ひ出した。

「なに、千圓くれる。そんな物は貰ふわけにいかない。」裁判官はわざわざ取つておきの嚴つべらしい顏をして言つた。「俺はお前の親父と近づきではなかつたぢやないか。見ず知らずの他人から遺産を貰ふといふ法はない。」

「いえ、貴方のものです。是非貴方に差上げてくれと親父がくれぐれも申し殘した事なんですから。」

孝行息子は何でもかでも千圓を押し付けようとした。

「困つたな。遺言といふのであつてみれば。」裁判官は眞實困つたやうに額を手でおさへた。

「ぢや空取引をしよう。幸ひ裁判所の庭に雪がどつさり積つてゐるから、この雪を千圓でお前に賣るとしよう。ね、さうすればいいだらう、雙方の言分が立つて。」

孝行息子はそれに同意して、千圓を渡して歸つた。すると、そのあくる朝また裁判所へ喚び出された。

「お前は昨日この構内の雪を買つたね。あんな物をいつまでも置かれては迷惑だから、すぐ引取つて貰ひたい。」

裁判官は物差のやうな嚴正な顏をして言つた。孝行息子は呆氣にとられたが、さてどうする事も出來なかつた。

「雪を引取る事は出來ないといふのか。」裁判官は言つた。「それぢや、契約違反の賠償として二百圓の科料を命ずる。」

孝行息子はべそをかきさうな口もとをしたが、それでも默つて二百圓を拂つて外へ出た。そしてふと親父の遺言を思ひ出した。

「さうだ、親父さんは世界中の一番賤しい男にくれてやれと言つたつけが。まあ、よかつたこれで遺言通りにしたといふもんだ。」

獨身主義者と結婚と

今度の歐洲戰爭で哀れな犧牲者となつた英國のキッチナア元帥が、名高い獨身主義者だつ

たのは誰もが知つてゐる通りだ。女嫌ひな獨身主義者にとつて、キッチナアを亡くしたのは世界を半分失つたのと同じ程の損失だつたに相違ない。

キッチナアがまだ印度にゐた頃、その下で副官を勤めてゐた或る若い將校が、今度結婚したいから暫くの間休暇を貰つて本國英吉利に還らせて貰ひたいと言ひ出した。女嫌ひな元帥は結婚だと聞くと額にさつと皺を寄せたが、それでも話の濟むまではじつと辛抱してゐた。

「結婚するつて。でも、お前はまだ二十五にもならんぢやないか。一年待ちなさい。そしてその上でまだ結婚したかつたら、休暇を與へる事にしようから。」

元帥はかう言つて、若い將校の玉葱のやうな蒼白い顔を見た。將校はふくれ面をしたが、それでも言葉はかへさなかつた。

一年は過ぎた。若い將校は、キッチナアが上機嫌な折を見計らつて、また以前の賜暇問題を持ち出した。

すると、キッチナアの石のやうな四角い、そしてまた石のやうな嚴肅な顔に、急に石のやうな冷たさが現れて來た。

「十二ケ月考へぬいても、お前はまだ結婚したいつて言ふんだね。」

「はい、早く身を固めた方がいいかと思ひまして。」

若い將校は、腹の減つた狗が主人の顏を見る折のやうな狡さうな眼つきをした。

「それぢや仕方がない。休暇を取るのもよからう。」この名高い獨身主義者は忌々しさうに白い齒を見せながら言つた。「相手は女ぢやないか、それに一年も續いて愛情をもつてるなんて。俺はそんな男がこの世にあらうとは思はなかつたよ。」

若い將校は希望通りに休暇を貰つたらいいので、おまけに好きな娘と結婚する事さへ出來たらいいので、別に氣むづかしやの元帥と議論する必要もなかつたのだ。で、お辭儀をして室から外に出ようとしたが、それだけでは何だか物足りないやうに思つたので、つかつかと後がへりをして來た。

「申し添へておきますが、私が結婚しますのは、去年のと同じ女ではございませんから。」

キッチナアはだしぬけに耳朶を引張られたやうな顏をした。――若い將校め、なんといふ無作法な事を言つたものか。こんなのに限つて一度は女の前でとんぼ返りをする奴である。

雄辯家の親孝行

親孝行にも色々ある。支那の實行家（親孝行にも理論家と實際家との二通りがある。）のして來た行跡を見ても、寒中に筍を掘つたり、裸で張りつめた氷の上に寢たり、いろいろ變つた型がある。

米國民主黨の領袖ブライアンが、いつだつたか、自分の出る演說會場へ、たつた一人しかない大切な母親を引張つて行つたことがあつた。この名高い演說家の考へでは、廣い會場で大勢の聽衆の前で、自分の息子が瀧のやうな雄辯をふるつてゐるのを見るのは、老年の母にとつてどんなにか嬉しからう。かうして自分は聽衆を敎育する上に、母親をも慰めることが出來る。こんな結構な方法が外にあるものではないと、ブライアンはしみじみ自分の口達者なのを嬉しく思つた。

ブライアンは演壇に立つた。そして雷のやうな聽衆の喝采を浴びながら、得意のおしやべりをし續けた。演說はいつものよりもずつと長かつた。老いた母親が聽いてゐると思へば、演說もいい加減の事は言へなかつた。で、少しは母親の好きな砂糖や嘘を混ぜて、顏中を眞赤にして喚き散らした。

演說がやつと濟むと、ブライアンは額の汗を拭きながら、母親の傍へやつて來た。

「お母さん。どうでした。巧かつたでせう。」

「さうですね。かなり出來たやうだつたよ。」母親は睡さうな眼をくしやくしやさせながら言つた。

「あなたのお氣に召すやうに今日は特別に長くやつたのですよ。」ブライアンは鼻先の汗を拭き忘れて言つた。

「さうかい。それであんなに長かつたのかい。」母親は悲しさうに言つた。「それぢや三分の一くらゐに切りつめておくれだつたら、もつとお母さんは喜んだらうよ。」

裸體

むかし、江戸に龜田鵬齋といふ學者がゐた。貧しい學者にしても夏はやはり金持同樣に暑かつたから、鵬齋はいつも六月になると、ずつと素つ裸で暮してゐた。その鵬齋に何とかいふ小娘があつたが、その小娘もたつた一枚きりの單物を汚して、母親に洗濯して貰ふ間は、いつも裸體で待つてゐたといふ事だ。

ある時、鵬齋が知合の饗應に招かれた事があつた。丁度夏初めで、鵬齋は別に着替を持つてゐなかつたから、着古しの單物のままで出掛けて行つた。

むかし賴春水は、貧乏なところから羽織といつては、いつも白木綿を裁つて着てゐた。ある時、仲よしの菅茶山がそれを見て、隨分古い羽織だといつて、

いつ見ても變らぬ色の羽織かな

と、一句詠んで冷かした事があつた。すると、負けぬ氣の春水は、すぐ竹箆返しに、

お前の袴いく代經ぬらん

と後の句を繼いだ。茶山は驚いて今更のやうに自分の袴を見た。袴は十年來着古した物だつた。鵬齋の着物がこんなに古かつたかどうかは知らないが、あまり負は取らなかつたに相違なかつた。

夜が更けて、鵬齋はのつそりと歸つて來た。女房が玄關まで出迎へて見ると、この學者は素つ裸のまま默つてそこに衝立つてゐた。

「まあ、あなた、どうなすつたの。」女房は驚いて口を開いた。「素つ裸ぢやありませんか。」

「うむ、御覽の通り裸だ。」鵬齋は熟柿臭い息をついた。

「そんな姿をして人通りのなかをお歸りになりましたの。」

「うむ、歸つて來たよ。」

學者の女房は、誰でも平素から辛抱强くしつけられてゐるものだが、それでもどうかすると、蟯螂のやうに癇癪を起しかねないものだ。鵬齋の女房はきつとなつた。

「歸つて來たよもないもんですよ。一體着物はどうなすつたの。」

「道へ捨てて來たよ。」鵬齋は鬚の伸びた頤をあんぐりあけて大きな欠伸をした。「醉拂つて溝へ陷(はま)つたもんだでの。」

「溝へおつこつたつて、着物まで捨てなくつてもよささうなもんぢやありませんか。」

女房は鵬齋の單物と一緒に、自分の櫛も、箕も、貞操も、投げ捨てられたやうに艶(むつ)となつて口を尖らした。

「だがの……」鵬齋は素直に言譯をするらしく言つた。「着物がべとべとに汚れて、臭くつて仕樣がないもんだでの。」

「臭くつたつて……」女房はどんな臭いものでも、まだ貧乏よりはましだといふ事をよく知つてゐた。「明日からは、もうお召しになるものがないぢやありませんか。」

「着る物がなかつたら裸體でゐるさ。」鵬齋は片手を伸ばして、脊骨の邊りをぽりぽり搔きながら言つた。身體中にどことなく臭い匂がした。「乃公だつて裸體で生れて來た人間なんだからな。」

「それもよどざんせう。」

女房はぷりぷりしながら言つた。鵬齋がそれから幾日間裸體で通したかは私も知らない。

貧乏畫家

むかし、渡邊華山の弟子に櫻間青崖といふ畫家がゐた。貧乏人の多いむかしの畫家の中でも、これはまたずば抜けた貧乏人で、住居といつては、わづかに胡床(むくら)が組まれる程の小さな家で、雨が降る日にはいつも雨漏りがして仕方がなかつた。そんな折には、青崖はいつも左の手で雨傘をさしながら、右の手ではせつせと繪を描いてゐた。そんなに雨漏りがする壘の上で何も繪など描かなくともよささうなものだ、じつと腕を拱んで、考へ事でもしてゐたらよかりさうなものだが、貧乏な畫家には考へ事などは禁物であつたので、青崖は雨傘をさしながらせつせと繪を描いた。

ある夏の日の事であつた。華山の弟子の一人、椿山が青崖を訪ねて來た。すると表の戸がぴつたりと締つてゐるので、椿山は外から大きな聲で喚いた。

「櫻間先生、先生はおいでではございませんか。」

暫くすると、中から掠めたやうな男聲で、

「先生は今日はお留守ですよ。」

と言ふものがあつた。椿山は平素から青崖の宅には主人のほか、猫の子一匹ゐないのを知つてゐるので、主人の留守に誰か應答をするものがあるのを不思議に思つた。さう思へば今の聲がどうやら青崖自身のに似てゐるやうに思はれてならなかつた。

椿山は又聲をかけた。

「先生は何方にいらつしやいました。」

「何方へ行つたか、そんな事が判つてたまるものか。」

家の中からは、大きな聲で叱りつけるやうに呶鳴つた。それこそ擬ふ方ない青崖自身の聲であつた。

「さうおつしやるのは、先生御自身ぢやございませんか。」

椿山はさう言ひながら破けた障子の隙間から中を覗いて見た。そこには青崖が素つ裸の儘胡床をかいてゐたが、名前を呼びかけられたので、ついのそのそと立ち上つて來た。

「俺さ、俺には違ひないが、今ちよつと他人に入られては困るんでね。」青崖はかう言ひながら障子の側まで歩いて來た。「表に洗濯物の單衣が干してあるんだが、もう乾いたかしら……氣の毒だがちよつと觸つて見てくれないか。」

椿山は表の井戸端を見た。成程其處には洗濯物が一枚、物干竿に引つかかつてゐたが、どんなお心の濁いおてんたう樣でも、顏を顰めないでは見てゐられないやうな單物であつた。

椿山はちよつと手に觸つてみた。洗濯物はどうにか乾いてゐた。

「先生、乾いてゐますよ。」

「乾いてゐるか、それはいい。そんなら俺も留守ぢやない。」青崖はかう言ひながら戸を心もち明けて、中から顏を出した。「氣の毒だがついでにちよつとそれを取つてくれないか。」

椿山は言はれる儘に洗濯物をとつた。青崖は安心したやうに戸を押しあけて外へ出た。見

ると肌には何も着けてゐなかつた。椿山は自分の方が顔が赧くなるやうな氣持で、背後からすつぽりと洗濯物を着せかけた。青崖は安心したやうに聲を揚げて笑つた。

音樂家と小説家

波蘭共和國の今の大統領パデレウスキイが、秀れた洋琴家である事は知らぬ人もあるまい。大統領にならぬ前、この人はよく米國へ渡つて演奏會を開いたものだが、ある時何かの會合で、文豪ジヤツク・ロンドンに會つた。

ジヤツク・ロンドンといへば、名高い「野性の聲」で狗や狼の生活を書いた作家で、原始的生活が好きな餘りから、自分でも燒肉の代りに、血だらけな生の肉を齧つたり、取立ての蝸牛をそのまま鵜呑みにしたりした男だ。

小説家は髮の毛の長いこの音樂家を見ると口をきつた。

「パデレウスキイさん、洋琴つてなかなか好いものですね。私も大好きですよ。」

「ほほう、結構ですね。」パデレウスキイは、ほかに掛替へのない大切な指を膝の上で組み合はせながら言つた。「貴君は文化的な生活はお嫌ひのやうに承つてゐましたから、實は洋琴の方は餘りお好きではないかしらと思つてゐましたが……」

「いや、どうして、洋琴は大好きでさ。」小説家はこれまでいろんな荒仕事をして來たらしい、頑丈な兩肩を搖ぶりながら笑つた。「かう見えても、私は洋琴のお蔭で露命を繋いだことがあるんですからね。」

「洋琴で？　してみると、貴方もお彈きになるんですか。」

パデレウスキイは洋琴を彈く狼にでも出合つたやうに、眼を見張つて相手の顏を見た。

「いや、彈きません。だが、ほんたうの事を言ふとかうなんです。」小説家は血だらけな牛の肉を嚙み馴れた口もとを子供のやうに窄めながら言つた。「私の父はミスシツピイで農園をやつてゐましたが、ある時洪水ですつかり臺なしにされてしまひ、おまけに私達の住家も根こそぎ持つて行かれました。」

「ほほう、それはお氣の毒でしたね。」

パデレウスキイは心から氣の毒さうに言つた。そして小説家も音樂家と同じやうに、あまりいい月日の下には生れ合はさなかつたものだなといつたやうな表情をした。

小説家は言葉を次いだ。

「その折親父は卓子の上に乘つて逃げましたが、私は洋琴につかまつてやつと生命拾ひをしたやうな始末なんで。」

蓮のうてな

英吉利のグラスゴウにドナルドソンといふ爺さんがあつた。老病で死にかかつた時、枕もとに媼さんを呼んで言つた。

「媼さんや、お前にはいかいお世話になつたの。俺も今度こそはいよいよお迎ひが來たと思

ふから、どうせ行かんなるまいが、氣の毒なのは後に殘つたお前の身體ぢやてのう。」

「何を言はつしやるだ、後の事など心配せんと……」媼さんは悲しさが胸に一杯になつて來るやうに思つた。「氣をのんびりと持つてゐさつしやれ、病は氣一つぢやと言ふ程にな。」

「氣安めは言はん事ぢや。」爺さんは枯枝のやうな手を胸さきで振つた。

「ところで、媼さんや。あとに殘つたお前の身體ぢやがのう。一人暮しも辛からうから、俺に遠慮は要らんことぢや、いい先があつたらかたづいての、老先を氣樂に暮す工夫をせんならんぞ。」

「滅相な事言はつしやるな。」媼さんは貞操のかたい蟋蟀のやうな悲しさうな聲で泣いた。

「今さら外へかたづくなどと、そないな事したら、わしらあの世で二人御亭主を持つ事になりますだ。」

それを聞くと、病人の爺さんは急に默つてしまつた。そして鼾(ふご)のやうな音をさせて、すうと深い溜息をついた。爺さんの考へでは、亡くなつて後のこの世では兎も角も、あの世で、媼さんが自分より外に今一人の亭主を持つてゐる事は、とても辛抱出來なかつた。出來る事

なら、媼さんにどつさり遺産を残して、きれいに寡婦を通させたかつたが、別に懶けたわけでもないのに、どうしたものか爺さんには大して遺産といふ程の物が無かつた。爺さんは空洞のやうな眼をしてじつと考へ込んでゐたが、ふといい事を思ひついたので、急に顔中が明るくなつた。

「媼さんや、いい人があるわい。お前も知つてのあのジョン・クレメンス爺さんな、あの人がいいわい。あれは人間が親切な上に、神信心しないさうぢやから、お前がかたづくのに誂へ向きといふものぢやて。」

「何故の。」媼さんはけげんさうな顔をした。

「考へてみさつしやれ、俺とお前とはあの世で一緒にはなれようが、不信心者のクレメンス爺さんが、天國へ上つて來られよう筈がないからの。」

「なる程な……」

媼さんはそれを聞いて道理至極な事のやうに思つた。それにつけても、そんな道理至極な事を思ひつく爺さんと別れるのは悲しくてならなかつた。だから媼さんは蟋蟀のやうに身を

ふるはせて泣いてゐた。

文豪と旅宿の亭主

英國の文豪キプリングの邸前に美しい並木があつて、主人が自慢の一つになつてゐる。ところが、この頃になつて急に樹に元氣がなくなつたので、どうした事かとよく調べて見ると隣の旅籠屋へ出入する馬車のせゐで、車の肩が突き當る度に樹肌が擦りむけてゐたのだと判つた。

キプリングはぶつぶつ呟きながら、隣の主人あてにこれからは少し氣をつけてくれるやうにと手紙を書いて出した。旅籠屋の亭主はそれを受取ると、すぐ自分の家に泊り合はせてゐる客の一人をたづねた。

「旦那、あなたはキプリング先生の書いた物をお購ひになりませんか。あの先生の物は滅多

に手に入らないつていふ事でがすぜ。」

「キプリングさんの手蹟かい。」客は聲をはずませた。「有るなら讓つて貰ひたいもんだね。かねがね欲しいと思つてたんだ。」

「ぢや、お讓りしませう、やつと今手に入つたところでがさ。」

旅籠屋の亭主は、たつた今受取つたばかりの文豪の手紙を賣りつけた。そして代りに十シルリングの銀貨を受取つた。

文豪は隣家から一向返事が來ないので、眞赤になつて怒つた。そして今度は火のやうな手紙を書いて送つた。

旅籠屋の亭主は、その手紙をまた泊り客の一人に賣りつけた。そして一磅の金を默つてポケツトにしまひ込んでしまつた。

キプリングは幾日經つても返事が來ないので、たうとう業を煮やして隣へ出掛けて行つた。

「御主人、お前さんのところへ、こなひだから二度ばかり手紙を出しておいたが、受取つてくれましたか。」

「はい、たしかに拜見しましたよ。」

旅籠屋の亭主は、銀貨をポケツトにしまひ込んだ、その同じ手で頤を撫でまはした。

「ぢや、なんだつて返事をくれない。」文豪はぷりぷりして言つた。

「でも、先生、私の方では毎日でもお手紙が戴きたいんです。」隣の亭主は揉み手をしながらお辭儀をした。「馬車でお客を送るよか、その方がずつと商賣になるんですからな。」

毬を返せ

一七四〇年、獨逸聯邦が騷いだ。そのどさくさ紛れに、普魯西のフレデリツク大王は、シレイジヤの土地を、墺太利の女帝マリア・テレサの柔かい手からひつたくつた事があつた。ちやうどその頃、フレデリツク王が自分の部屋で何か頻りに書き物をしてゐると、ふだん可愛がつてゐる甥の一人が入つて來て、卓子の側で毬投げを始めたものだ。

英國の詩人テニスンは、自分が詩作に夢中になつてゐる時、女中がばたばた足音を立てて入つたからといつて、急に癇癪を起して、インキ壺を投げつけたといふ事だが、フレデリック大王は詩人よりはいくらか辛抱强かつたと見えて、そんなかに平氣で書き物をしてゐたが、どうしたはずみか、甥の投げた毬が間違つて王の凭りかかつてゐる卓子の上に落ちて來た。王はちよつとペンを停めて、毬の方へ目を逸らしたが、指先でそれを押しのけると、默つてまた書き物を續けた。

と、間もなく毬はまた卓子の上に落ちて來た。王はそれを押へて、甥の方へ投げかへしてやつたが、その途端、白い眼をしてちらと睨んでみせた。甥はちよつとお辭儀をした。

「叔父さん、御免なさい、これから氣をつけますから。」

暫くすると、毬はまた卓子の上に落ちて來た。そして普魯西の英雄にからかひでもするやうに二三度王の鼻つ先でぴよんぴよんと躍つてみせた。王は矢庭にそれを引つ摑んで、自分の隱しの底へ突込んでしまつた。甥はそれを見ると、すまなささうに擦り寄つて來た。

「叔父さん、御免なさい。僕お詫をしますから、毬を返して下さい。」

叔父は氣むづかしい顏をして、せつせと書き物をしてゐたが、どうしても毬を取出さうとしなかつた。

甥はいつまでもねだつてはゐなかつた。暫くすると、思ひ切つた顏をして王の前に立つた。そしてきつぱりした調子で言つた。

「叔父さま、あなたにお伺ひしますが、毬はお返し下さるんですか、下さらないんですか。」

叔父はぎよつとした氣味で、小さい甥を振向いてみた。そして涙ぐんだ眼のうちに、王であらうが、誰であらうが、許すまじき力を見てとつた。王は急に顏色を和げて、隱しから毬を取出してくれた。

「うい奴ぢやのう、毬は返してくれるぞ。そちがゐるうちは、シレイジヤも先づ安心だといふものぢや。」

五千弗の提琴

いつだつたか大阪に來た事のある露西亞の提琴家ビアストロは、十萬圓の提琴を持つてゐるといふので名高かつた。十萬圓の現金をもつてゐるといふのに比べると、それだけの提琴を持つてゐるといふのは、なんだかちよつと奥ゆかしい點がないでもない。

ビアストロのそれとは比べ物にならないが、ヴイテリイといふ提琴家も、五千弗の提琴をもつてゐるので名高かつた。ある時オウション・グロオヴで、その提琴で演奏會を開くことになつた。値の高い樂器は、美い音がするものだと思ひ込んでゐるらしい音樂好きは、その日になるとわれ勝ちに會場へ押しかけて來た。

暫くすると、この名高い提琴家は、客の前に現れた。そして弓を取上げると勢よく彈き出した。その音といつたら美しい女の啜り泣きをするやうな調子で、聽衆は誰一人今日までこ

んな美しい音樂を耳にした事がないらしかつた。

「さすが五千弗の提琴程あつて、なんとも言へませんな。」

勘定高い聽衆の誰彼は、弓のさきから、金貨が一つづつ零れおちるやうに思つて、腹の底から搖り動かされた。

暫くすると、この提琴家ははたと弓の手を停めた。そして樂器に何か故障でも起きたらしく幾度か調子を直さうとしてゐたが、どうも思ふやうにならないので、急に癇癪を起した。そして樂器を手に取直したかと思ふと、暴に椅子の背に叩きつけた。樂器は女に騙された男の心臓のやうにこなごなになつて碎けてしまつた。

聽衆は越瓜のやうに眞青になつて顫へた。亂暴な音樂家もあつたものだと我鳴り散らしてゐる男もあつた。美しい娘をもつた母親は、どんな事があつても音樂家になど娘は與れてやるまい。さもないと、どうかすると、朝の珈琲がうまくないからと言つて、娘を椅子の背に叩きつけないものでもないと思つたらしかつた。

すると、司會者が現れた。そして騷ぎ立てる聽衆を制しながら、諸君は眞青になつてお驚

きのやうだが、今毀したのは五千弗の提琴ぢやない、實は一弗六十五仙の安物に過ぎない。これからお聽きに達するのが名高い例の提琴であると斷りを言つた。

聽衆は聲を立てて笑ひ出した。だが、音樂家が弓を取ると、すぐに鎮まりかへつて耳をすました。成程結構な演奏ではあるが、さうかといつて、一弗六十五仙の先刻の提琴と比べて音色に格別の違ひはなかつた。それにつけても聽衆は思つた。音樂のいい惡いは樂器のせゐぢやなくて、音樂家の腕であると。

日本の音樂家が五千弗の樂器を持たないのは聽衆にとつて幸福である。そしてもつと幸福なのは、そんないたづらをするほど音樂家の腕が冴えてゐない事である。

劇作家と舞臺監督

日本の芝居では、近頃見物がこれまでの出し物に飽きて來たところから、頻りと新作を歡

迎して、書きおろし物とさへいへば、どんな拙い物でも板に上せてゐるので、一つ二つ自分の作が演ぜられると、もういつぱしの劇作家か何ぞのやうに氣取つたものの言ひやうをする新作家が、そこらにちよいちよい見つかるやうになつた。ほんたうにめでたいことである。

それとはちがつて、これは亞米利加の話であるが、あちらにダビッド・ベラスコといふ舞臺監督がゐる。ある日豫て見知り越しの男が訪ねて來たので、舞臺監督はきさくに會つてみた。その男は言つた。

「私の友人のスミスといふ男が、こなひだ三幕物の喜劇を御覽に入れた筈ですが……」

「ええ、そんな事がありました。あの方があなたのお友達でしたか。」舞臺監督は上等の葉卷を喫しながら言つた。「その喜劇は一昨晩でしたか、あの方に本讀みしていただきました。承つたのは私と俳優二人の都合三人でしたつけ。」

「本讀みの結果はどうでした。お氣に召しましたか。」

客は氣づかはしさうに相手の顔を見た。これまで數へ切れないほど度々そんな眼つきで顏を見られた事のある舞臺監督は、こんな場合にはどうしたらいいかといふことをよく知つて

ゐた。それはしきりと葉卷の煙を喫しながら、せいぜいかけかまひのない顏をしてゐればいいといふことだ。

「お氣に召しましたかしら。」客は言ひにくさうに言つた。

「正直に言ふと……」舞臺監督は强ひて正直らしい口もとをした。「私達三人の意見は、あのなかで一幕は無駄だといふ事に一致してゐました。」

「はあ、さうでしたか。して、どの幕が無駄だとお考へになりました。」

その男は舞臺監督の氣にかなつて、板に上すことが出來るのだつたら、友達の作者に勸めて、一幕くらゐはどんなにでもして刈りこましてもいいと考へてゐるらしかつた。

「どの幕つておつしやるのですか……」舞臺監督は氣の毒さうに言つた。「ところが私達の無駄だといふ幕は、三人が三人とも違つてゐるんですからね。」

文豪の原稿

紀州に光明寺といふ黃檗の寺がある。そこの開山は、圓通といふ草書に巧みな坊さんだつた。ある人がこの坊さんから手紙を貰つたが、どうしても讀み下しにくい箇所があるので、わざわざ光明寺を訪ねて、和尙にその手紙を見せたものだ。すると、和尙は幾度か繰返してその手紙を讀んでゐたが、たうとう投げ出すやうに、

「わしが書いたには相違ないが、どうにも讀み下しやうがないわい。幸ひ弟子にわしの書いたものをよく讀みわけるのがあるによつて、そいつに見せたがよからう。」

と言つたさうだ。こんな風に自分で自分の書いたものが讀めないのも多くはなからうが、トルストイの原稿なども、夫人の外には讀みこなす人が少く、印刷所の植字工などの手にはとてもおへなかつたので、この人の原稿はすつかり夫人の手で書き直されたといふことだ。

「紅文字」の著者ホウソンも隨分わからない文字を書いた人で、この人の遺稿にはかなり價値のあるものも遺つてゐるが、それが今だに出版せられないのは、誰一人十分讀みこなせる人が居ないからださうだ。

カアライルも名高い悪筆家で、この人の原稿にはどんな植字工も困らされたものだ。あるとき倫敦の印刷屋が蘇格蘭から素敵に腕の優れてゐる植字工を一人よんで來た。仕事始めに職工の手に渡されたのは、ほかでもないカアライルの原稿だつた。すると、それを一目見た職工はうなされるやうな聲を出した。

「また此奴に出會したんだな。」職工はいきなりその原稿を卓子の上に叩きつけた。「此奴から逃げ出したいばかりに、わざわざ倫敦あたりまで出掛けて來た俺ぢやないか。」

御寢間の埃

佛蘭西のルイ十五世の皇后が、ある時ふだん自分のあまり使つたことのない公式用の寢臺の上に、小さな埃を見つけたことがあつた。皇后はちよつと美しい眉を寄せた。時を移さず皇后宮大夫は御前に呼び出された。皇后は默つて可愛らしい指でその埃を指ざして見せた。皇后宮大夫は二三度お辭儀をしたと思ふと、次に控へた皇后宮附の御寢間係を呼び出した。御寢間係はその埃を見ると、顏を眞赤にしてそのまま御前を下つて行つたが、一時間ほど經つと國王附の御寢間係を連れてまたはひつて來た。そして御寢間の上に殘つてゐる件の埃を見せて、一刻も早く取りのけた方がいいと權柄づくに言ひ渡した。國王附の御寢間係は頭を横に振つた。

「そんなことは私の仕事ぢやありません。私の職責として皇后の宮の御ふだん用の御寢間こそ手にかけてゐますが、公式用の方は私がお觸り申すことすら出來ないことになつてゐるのですから、この始末はどなたか外の方でありませんと……」

皇后の宮はその言葉に一應道理があるやうに思はれたので、誰が係なのか、それをよく吟味して、その者に件の埃の始末をさせるやうにと仰せられた。その後係の者を調べるために

いろんな會議が開かれて、二月ほど無駄な月日が經つた。皇后の宮は大夫を召出されて、埃はどうなつたかと訊かれた。大夫は叮嚀にお辭儀をした。

「申譯がございません。引續きかれこれ詮議は致してをりますが、まだ係の者が判りかねますので、埃はそのまま差置いてございますやうな次第で……」

たうとう皇后の宮は、ある朝御自分で刷毛をもつてその埃を拂ひ落された。埃は直ぐに見えなくなつた。

時計

小説家のS氏は文學者に似合はない立派な時計をもつてゐる。英國のベネット製の懐中時計で、側はニツケルだが、機械のいい、時間の正しい事にかけてはちよつと類がない。S氏自身の言葉によると、日本にたつた四つしか無いといふ大切な代物である。

この時計がS氏に不似合だといつて、腹を立ててはいけない。不似合だといふのは値段が高いからいふのではなく、時間がそんなに正しいのをいふのである。S氏が汽車の車掌か、測候所の技師であるならば兎も角も、小説家であつてみると、ちよいちよい時間の遲れる時計を持つてゐた方が、萬事につけて都合がよささうなものだ。

そのS氏が、あるとき友達と一緒に電車に乘つた事があつた。車が日比谷まで來ると、車掌は乘換切符に鋏を入れようとして、自分の腕時計を見た。すると安物の腕時計はいつのまにか兩手をひろげてとまつてゐた。

「これはいかん、時計がとまつてゐる。」車掌は呟きながら車中のお客を見まはした。「どなたか時間を教へていただけないでせうか。」

「時間か。」S氏は帶の間から自慢の懐中時計を取出した。S氏の考へでは、成るべくなら日本にある時計といふ時計を、自分のもつてゐるベネット製の時計に合はせておきたかつたのだから、それにはこんな恰好な機會はなかつた。「ちやうど十二時に五分前だよ。」

「有難うございます。」

車掌は禮を言ひ言ひ針を直さうとすると、S氏と同じやうに、ポケットから時計を取出して時間を見てゐた批評家の友人は、横つちよから口を出した。

「をかしいな、僕のは十二時五分過ぎだぜ。」

「へえ、十二時五分過ぎ。」車掌はどつちに從つたものかとちよつと途方に迷つたらしかつたが、ひよいとS氏のニツケル側と友人の金側とが目に入ると、初めて判斷がついたやうに金側時計の持主の方に向き直つた。「あなた、十二時に五分過ぎだとおつしやいましたね。有難うございました。」

車掌は安心して腕時計の針を十二時五分に直した。

「あれだから困る。世間のわからずやといふ者は、機械を見ないで、ぢきに外側だけで、善い悪いを判斷するものだから。」

S氏は獨言を言ひながらにやりと笑つた。

S氏に告げる。世間はまあそんなもので、もしか世間の人達が、S氏の時計が日本に四つしかない事を知つて、皆が皆立ち停つて時間を聞いたなら、S氏もつくづく好い時計を持つた事を後悔するに相違なからう。

牧師の悪妻

親鸞聖人の室玉日姫のむかしは別だが、今の世には僧侶や牧師の女房に飛びはなれて偉い女は見つからないやうだ。アメリカのメソヂスト派の牧師にバックレエ博士といふ爺さんがある。この爺さんが或る時南合衆國の方へ説教に行つて、そこにある亞米利加印度人の或る教會で信仰談話會に列したことがあつた。

すると、一人の色の黑い女が眞先に立つてお話を始めた。女は厚い唇から唾を飛ばしながら、宗教は私のやうな見るかげもないものにまで光を與へて下すつた。慰めを與へて下すつた。安心を與へて下すつた。そして又家庭に平和を與へて下すつた、と言ひ出した。そのまま默つて聞いてゐたら、女は郵便切手や銀行の小切手のやうなくだらぬものまで神様に感謝

しかねないやうに思はれたので、博士は兩手で押へつけるやうにして横から口を出した。

「奥さん、それは御結構なことですが、實際方面では如何ですかな。あなたの宗教は御主人への御飯支度に多少とも効能がございましたかしら。御主人はあなたが宗教をお信じになつてから、ずつと幸福でいらつしやいますかしら。それから……」

バツクレエ博士がなほも言葉をつがうとすると、だしぬけに誰とも知らず横から腰のあたりを突くものがあるので、博士はうしろを振向いて見た。すると、そこには色の黑い土地の牧師が遠慮さうに首をすくめて縮こまつてゐた。

「先生、どうぞ御質問はそのくらゐにして戴きたいものですね。實はあの女は手前の女房でございますので……」

さすがの博士もそれを聞くと、苦笑ひするより外に仕方がなかつた。なぜといつて、その牧師は女房のこしらへてくれる御飯だつたら、どんなものにでも舌鼓を打ちさうな顔をしてゐたから。

短い大演說

亞米利加の前大統領ウヰルソンは名だたる雄辯家だが、いつだつたか演說についての心得を話して、

「一時間くらゐの長さだつたら、即座に出來る。二十分程のものだつたら、二時間の準備が要る。もしか五分間演說だつたら、一日一晩の支度がなくつちや。」

と言つたことがあつた。實際演說といふものは、短ければ短いほど骨が折れるものだ。

その短い演說を誰よりも巧みにやりおほせたといつて、ある時それを自分の女房に自慢した男があつた。それは Joseph Choate といふ亞米利加の法律家出の外交官であつた。

「短い演說はむづかしいものだと、むかしから言ひ傳へられたものだが、俺はずつと以前ほんたうに短い演說で、すばらしく効果的なのをやつたことがあつた。演說は確かに大受けだ

つたよ。」

と言つて、この外交官は眼鏡越しに夫人の顔を見た。夫人はせつせと編物をしながら、おつきあひらしく返事をした。

「さう、それは結構だつたのね。そして聽衆は幾人くらゐあつたの。」

「聽衆かい。」外交官は胡散さうに頤の周りを撫で廻した。「聽衆はたつた一人だつたよ。」

「え、たつた一人……」夫人は編物の手を止めて夫の顔を見た。「そしてその一人はどんな方だつたの。」

「若い、美しい女だつたよ。」

外交官はわざと落着き拂つて言つた。

「まあ、若い女の方。どんなお話をなすつたの。」

夫人は險しい目つきをして夫を見た。もしか夫の顔のどこかに綻びでもあつたら、すぐに編針でもつてつづくりでもしさうな權幕であつた。夫人の膝からは毛絲の玉が小猫のやうに轉がり落ちた。

「私は貴女を愛します、と言つただけだつたよ、話は。」

「まあ、そんなこと言つたの。そしてその方今どこにいらつしやるの。」

「今ここにいらつしやるよ。」外交官は節々の高い指で皺くちやな夫人の顔を撫で廻した。

「演說は確かに大受けだつたね。」

「ふ、ふ、ふ……」

夫人は目を細めて、猫のやうに咽喉をころころさせてゐた。

自動車王と子供

米國の次期の大統領選擧に共和黨の一候補者として、ミシガン州のデアボーン倶樂部から推されてゐるのは、人も知る自動車王のヘンリー・フオウドである。その自動車王が昨年だつたか、夏の眞中に友達のいくたりかと一緒に、自分の持地である華盛頓州の或る森へ野宿

に出掛けたことがあつた。森に着くと、自動車王は直ぐにシャツ一枚になつた。

「これから薪の用意をしなくつちや。」

かう言つて、自動車王は鋸を持つて木立のなかへ駈け出して行つた。すると、先刻から一行を出迎へに來てゐた、自動車王の持地の隣に住んでゐるリイといふ男の小忰も、後を追うて森の茂みに姿を隱した。

二人は一緒になつて、そこらの木を伐り倒して、それを薪に挽いた。自動車王は少し挽き疲れたので、あたりの切株に腰を下した。そして掌にへばりついた鋸屑の儘で、額の汗を押し拭つた。

「お隣の坊ちやん……」自動車王は傍でせつせと薪を挽いてゐるリイの忰に話しかけた。

「坊ちやんは知つてるのかい。君が今一緒に薪を挽いてるのが、米國切つての自動車王ヘンリー・フオウドさんだつてことをさ。」

それを聞くと、隣の小忰は急に鋸をやめて、猿のやうに小ざかしく顏を振向けた。そして自分の傍に立つてゐるのは、自動車王だらうが、白樺の木だらうが、そんなことはどうでも

いいといつた風に返事をした。

「フオウドさん。そんならあなたも御存じなのですかい。ここで今一緒に薪を挽いてゐるのが、リイさんの御子息だつてことをさ。」

自動車王は鋸の腹で横面を張り飛ばされたやうに思つた。

そんな話を今一つしよう。――歐洲戰爭の前、亞米利加生れの若い女が獨逸へ旅行して、ある機會に前の皇太子に會つたことがあつた。皇太子は立派な宮殿のなかを方々案内し廻つた末、ホオヘンツオルレルン家の御先祖の肖像がずらりと竝んだ或る室にはひりながら言つた。

「貴女のやうな亞米利加生れの方には、ちよつと合點がゆきかねるでせう。私は自分の先祖調べをして、二十六代まで調べ上げることが出來るんですからね。」

亞米利加女は雌猿のやうに白い齒をむき出した。

「それは御結構ですね。ですが、そんなこと以外に、あなた何がお出來になるの。」

獨逸帝國の豫言

乾坤一擲の大賭博を打つた獨逸皇帝の祖父が、ウイルレム一世であるくらゐの事は知らぬ人もあるまい。この人がまだ普魯西王フレデリキ・ウイルレム四世の皇弟であつた一八四九年の或る秋の日、御微行でライン河の河つ縁をぶらぶらしてゐた事があつた。佛蘭西の二月革命から飛火した伯林暴動に對するその態度が善くなかつたといつて、ウイルレムは方々から盛んに不評判を浴びせられてゐた頃で、自分の運命にいつかまた芽が吹かうかなどとは、夢にも思つてゐなかつたので、暗い顔をして黄ばんだ森陰を歩いてゐた。

そこへひよつくり顔を出したのは、ジプシイの占ひ女で、蔦色の顔を皺くちやにして、

「陛下、御運を見させて戴きませう。」

と言つてお辭儀をした。

「陛下」と聞いて、ウイルレムは少からず喜んだ。

「陛下つて、どこの國のだい。」

「申上げる迄もありませんさ、新しい日耳曼帝國のね……」

占ひ女はにやにや笑つて返事をした。

ウイルレムはいくらか眞面目になつて來た。

「そんな帝國がいつ出來るな。」

ジプシイの女は紙片を取出して、拙い文字でその年の一八四九年へその數字をそれぞれ書き加へた。

1849
1 8 4 9
―――
1871

「御覽なさいまし、こんな數が出ました。してみると、一八七一年だと見えますよ。」

實際その通りで、日耳曼帝國が出來上つたのは、一八七一年だつた。

ウイルレムは身體を乘り出すやうにして訊いた。

「ぢや、その帝國を乃公は幾年くらゐ治めるだらうな。」

占ひの女は、紙片でまた勘定を始めた。以前と同じやうに一八七一年へ、その數字をそれぞれ書き加へながら。

1871
1 8 7 1
―――
1888

「ちよいと、こんな數になりましたよ、これで見るに陛下の御治世は、一八八八年までといふ事になりますわね。」

實際ウイルレム一世の亡くなつたのは、その一八八八年であつた。

皇帝はジプシイの女がてきぱきと返事をするので、いくらか調弄(からかひ)氣味になつて訊いた。

「そしてその帝國はいつまで續くだらうな。」

「さやうでございますね。」

女はまた勘定をし出した。一八八八年へ、その數字をそれぞれつけ足しながら。

1888
1 8 8 8
―――
1913

「こんな數が出ましたよ。」

ジプシイの女は相手の眼の前へ、1913といふ數字を突きつけた。

皇帝はその數字を見ると、ふふんと鼻で笑つて行き過ぎたさうだが、一九一四年に始まつた歐洲大戰が、獨逸帝國をみじめな破滅に持つて行つたのを思ふと、ホオヘンツオルレルン家の最後の治世は一九一三年だつたといふ事になるのである。

飯を安く食ふ法

米が高くなつて、世間が騷々しくなつて來た。この食料品の暴騰から來る生活難を濟ふには、朝鮮米を行き渡らせるのもよからうし、方針を過つた役人達を農商務省の椅子から引きずり下すのもよからうが、今一つそれよりもずつと良い方法が殘つてゐる。

話は舊いが、德川四代將軍の頃、阿部豐後守忠秋が老中を勤めてゐた事があつた。豐後守

といへば、江戸市中に棄兒があれば、吃度拾つて養育した程の慈悲深い男だつたが、それでも時々は剽輕な悪戯をして、友達を調弄ふ程の心の餘裕を持つてゐた。

ある日の事、豊後守は同僚大久保忠成が大きな辨當箱を持つて來てゐるのに氣がついた。

「忠成め、とんだ食ひぬけと見えるて。」豊後守はそつとその辨當箱に觸つてみた。箱は鎧櫃ほど持ち重りがした。「おそろしい重みだな。こいつをこつそり食べて置いて、どんな顏をするか見てゐたら面白からうて。」

かう獨言を言ひ言ひ、四邊を見まはしながら、そつとその辨當を盗み食ひした。やつと食べてしまつた後では、腹は大名を鵜呑みにした蟇のやうに膨れてゐた。暫くすると、忠成がひよつくりそこへ顏を出した。ちやうど時分どきなので、默つてそこにあつた辨當箱を取上げた。そして蓋を明けたかと思ふと、急に變な顏をしてじつと内部を見てゐたが、暫くすると氣もない顏で、

「今朝方あまり食べ過したものか、どうも食氣がなくて困る。」

と呟きながら、そつともとどほりに蓋をして、箱を側に押しやつた。

豊後守は可笑しさを嚙み殺して、忠成を相手に何かと世間話をしてゐた。話してゐるうちに、忠成の返辭が段々氣乘りがしなくなつて來るのも可笑しい事の一つだつた。暫くすると忠成は、

「今日は屋敷に用事があるので、少し早引をする。」

と言つて慌てて下つて行つた。豊後守はその後姿を見送りながら、腹を抱へて笑ひこけた。

夕方豊後が邸に歸つて、用人を相手にその話をすると、用人ははたと膝を叩いた。

「なる程、さう承つて、初めて解せました。」

そして獨りでくすくす思ひ出し笑ひをした。豊後が理由を訊くと、先刻忠成は道の通りがかりに、腹が空いて困るから、湯漬なりと振舞つてほしいと言つて座敷に上り込み、主人も家來も、負けず劣らず大食をして歸つた後だとの事だつた。豊後守は舌打をして殘念がつた。

米が高くなつたら、道の通りがかりに湯漬の食べられる良い友達をそこらに拵へて置く事だ。しかし良い友達は良い狗ころよりも少いものだ。仕方がなかつたら大名をでも友達にするさ。

人間の大小

歐洲戰爭で聯合軍側の大立物は、なんといつても英國首相ロイド・ジョウジを第一に推さなければならぬ。その大立物のロイド・ジョウジが、威爾斯（エエルス）生れの、身長の低い、やつと五尺そこそこの小男だとは知らぬ人が多い。

いつぞや、ロイド・ジョウジが南威爾斯の或る都市へ演說に出掛けて行つた事があつた。無論戰爭に關する演說で、自惚好きな英國人が、首相の口から直接獨逸文明が安物の外套のやうに、裏は襤褸つ切であるのを聽くための催しであつた。

その演說會の司會者といふのは、大のロイド・ジョウジ崇拜者で、この政治家の試みた演說は、どんなつまらぬものでも、みんな新聞を切りぬいて手文庫へしまつて置くといふ風の男だつた。だが、これまで一度も自分の崇拜する人に出合つた事がなかつたので、その日は

朝から胸をわくわくさせて待つてゐた。

會場には聽衆がぎつしり詰つてゐた。當日の演說家を案內して、會場へ入つて來た背の高い司會者は、先づ立つてこの名高い政治家を聽衆に紹介したが、そのなかに次のやうな言葉があつた。

「私はふだんからこの偉人を崇拜してをりましたが、正直に申しますと、身體のもつと大きい、見かけの堂々たるお方だとばかし思つてゐましたので、今日初めてお目にかかつて、實は驚いたやうな始末で……」

次いで立つたロイド・ジョウジは、小さいが、しかし胡桃のやうなかつちりした體軀（めやす）を演壇に運んだ。

「唯今承りますと、今日の司會者は、私にお會ひになつて、ひどく失望せられたやうな御容子で誠にお氣の毒に堪へません。」と首相は背高（のつぽ）の司會者へ皮肉な目つきを投げた。「だが今承つて初めて氣づいたのは、吾々の生れた北威爾斯と此方（こちら）とでは、人間を測るのに標準が違つてゐるといふ事で、南威爾斯では、人間を頤から下の大きさで測るらしいが、私共の北威

爾斯では、反對に頭から上の大きさで大小をきめる事になつてゐるのです。」

かう言つてロイド・ジョウジは、自慢の大きな頭を肩の上で振つてみせた。聽衆は譯もなく嬉しがつて、頭から下の馬鹿に大きい體軀を搖ぶつて喝采した。

婦人と多妻主義者

米國のユウタア州は、人も知つてゐる通り、モルモン宗の本山があるところだけに、そこには雞のやうに女房達をたんと引連れた人々も少くない。

このユウタア州選出の上院議員に、スムウトといふ男がある。先日紐育市の或る會合で、紐育生れを何よりの自慢にしてゐる或る婦人に出合つた事があつた。婦人はスムウトがユウタア生れだといふ事を聞くと、寡婦（やもめ）の牝雞のやうにぐつと反身になつて近づいて來た。

「スムウトさん、ちよつと伺ひますが、お國には一人の殿方で、奥さんをたんとお持ちの方

が隨分いらつしやるさうですが、ほんたうなんですか。」

婦人の言葉には、胡椒のやうな皮肉な處があつた。が、人づきあひの上手なこの上院議員は、別に厭な顏も見せなかつた。

「ほんたうですよ、奥さん。」

「失禮ですが、あなたもそのお一人なんですか。」

婦人は寡婦雞のやうに、伸びかかつた蹴爪で、おとなしい上院議員を跳ね飛ばしかねないやうな素振りを見せた。

「仕方がありませんよ。奥さん。實は土地の習慣で、私の故郷ではさうしなければならない事情があるのです。」

上院議員は剃立ての顏を撫でながら、目で笑つた。

「事情つて、どんな事情なんです。」

婦人はきめつけるやうな調子で訊いた。

「いえね、かうなんです。奥さん方のやうな紐育婦人が——」上院議員はにやにや愛嬌笑ひ

をしながら言つた。「紐育生れの御婦人が一人して持つてらつしやる色々な美點が、故郷の女では三四人集めなければ得られないからですよ。」

「まあ、お世辭のいいこと……」

紐育生れの婦人は、カナリヤのやうな聲を立てて笑つた。そしてその一瞬間、この上院議員に限つて、三百人女房を持つても一向差支ないと思つたらしかつた。

下腹で猫が啼く

むかし小野淺之丞といふ少年があつた。隣家の猫が度々大事な雛つ兒を盜むので、ある日築山のかげで、吹矢で猫を狙ひ撃にした。猫は額を射られて、後足で立ち上りざま、二三度きりきり舞をしてゐたが、その儘ばたりと斃れて、辭世も何も詠まないで死んでしまつた。氣の小さな淺之丞は、死樣のむごたらしさをひどく氣に病んでゐたが、その翌る日から自

分の腹のなかで、猫の啼き聲がすると言ひ出した。ある時は胸元で、また或る時は臍の邊で悲しさうな聲がするので、淺之丞は生きた氣持がしなかつた。

淺之丞には伯父が一人あつた。伯父といふものは借金を拵へたり、戀病に取憑れたり、猫に祟られたりする甥にとつては、少くとも一人は無くてはならない實用品なのである。伯父は言つた。

「武士の子が猫に祟られて病死でもしたら、いい恥さらしだ。いつそ切腹して果てたがよからう。」

淺之丞は眼に涙を一ぱい溜めて伯父の顏を見た。下つ腹のあたりでまたしても猫が啼いたやうに思つた。下つ腹といへば、つい五六日前までは、「武士道」と「孟子」とが相ずまひをしてゐた大事な場所であつた。

淺之丞は伯父に勸められて切腹する事になつた。兩親にもながの暇乞をして、やがて肌を脫いで、刀を手に取つた。介錯役に側に突立つてゐた伯父は落着いた聲で呼びかけた。

「慌てるではないぞ。折角の切腹ぢや。猫の聲のする邊を目がけて、一思ひに腹に突立てる

がいいぞ。」

「はい。」

と淺之丞は下つ腹を撫でながら、じつと聽耳を澄ませた。腹のなかでは猫の啼き聲どころか鼠一匹潜つてゐる容子も見えなかつた。

「今朝方までは確かに啼いてゐましたつけが……」淺之丞は臍の周りを指先で押へてみた。

「今は一向に聞えませぬ。」

「そんな筈はない。氣を落着けてよく聽いてみるがいい。」

淺之丞は身體ぢゆうを耳のやうにして聽き入つたが、何一つ物音はしなかつた。

「一向に猫らしいものの啼き聲は致しませぬ。」

「猫め、それぢや逃げたかも知れんぞ。」伯父は聲を立ててからからと笑つた。「逃げたものなら仕方がなからう。今更切腹にも及ぶまいて。」

甥は眞青な顏をして、短刀を白木の鞘に納めた。猫の逃げ出した下つ腹では、いつの間にか「武士道」と「孟子」とが歸つて來て、墓（ひきがへる）のやうに遠慮してそつと溜息をついてゐた。

珍しい廣告

倫敦タイムスの近刊號人事欄に次のやうな廣告が載つてゐる。

「私は結婚前の若い紳士ですが、私に結婚をすつかり思ひ止まらせて下さる先輩の方がいらつしやるなら、お近づきになりたいものです。」

これを數多い廣告のなかから拾ひ出した米國の雜誌記者は、奇妙な廣告だ、珍しい廣告だ、滅多に見かけられない廣告だと言つて、矢鱈に吹聽してゐる。

結婚は惡い事ではないが、あいにく相手が要るので、兎角思ふに任せぬ事が多い。それに女の註文が段々高くなつて來るのは、男にとつて何よりも荷厄介である。ずつと以前は女といふものは、亭主が男でさへあれば辛抱したものだが、今では天使でなくつちや迚も氣に入らない。ところが、多くの場合男は女にとつて天使どころか、牛のやうに鈍間で、おまけに

牛のやうに獣である。

男が女にとつて牛であるのと同じやうに、女は男にとつて蝙蝠である。謎である。多くの男は生れるときから死ぬまで女の爲に苦勞をしてゐるが、さういふ男でも、一生の間に少くとも二度はからきし女を理解し得ない時期があるものだ。二度といふのは、一度は結婚前で一度は結婚後の事をいふのだ。

世の中には結婚したがつてゐる男も少くはなからうから、その人達の爲に言つておくが、諸君が獨身で通したからといつて、失望する女はまさか二人とはあるまい。よしんば失望したところで、その人達は直ぐ諦められるに相違ない。ところが、諸君が結婚すると、一生涯失望し續ける人がある。その人は外でもない、細君である。

同じ時分、巴里の「フイガロ」新聞に次のやうな廣告が載つてゐた。

「上流の家庭にある鸚鵡の發音が悪いのを直すために、正確な佛蘭西語の出來る教師を雇ひたい。」

斷つておくが、發音の悪いのは、上流家庭の夫人ではなくて、夫人よりも口數の少い鸚鵡

なのである。

鸚鵡に佛蘭西語の巧い教師を雇ふといふと、一寸見は贅澤なやうだが、鸚鵡に訛を喋らしておいて、じつと辛抱してゐるよりか、どれほど儉約につくか知れたものではない。佛蘭西に文學が衰へないのは、鸚鵡の訛を氣にしないではゐられない程、國民が國語に敏感なところも一つの原因になつてゐる。多くの代議士に狗のやうな日本語で喋らしておいて、默つてそれを聽く事の出來る日本人の無神經さがつくづくいやになる。

生命の勘定

富豪ロスチヤイルド男が熱病にひどく苦しんだ事があつた。ちやうど男が七十五歳の折の事で、齢が齢だから、老人自身も迚も助からないものと諦めて、

「乃公も今度こそいよいよお暇乞だ。」

と、毎日のやうに溜息ばかりついてゐた。

お抱への醫者は、朝に晩にやつて來て、老人の脈を押へたり、咽喉を覗いたりした。咽喉を覗く折には、老人は家鴨のやうにあんぐり口をあけて仰向いた。

すると、醫者は叮嚀に見終つて、

「いや、大した事はございません、程なく御全快になりませう。」

と、請合つたやうに言つた。だが、醫者の言葉通りにもいかないものと見えて、病氣は重る一方だつた。

皮肉屋のトルストイは、死際に枕もとに立つてゐる醫者達の顏をじろりと尻目にかけて、

「この人達は醫者の學問にかけたら、みんな知りぬいてゐるんだが、その醫者の學問といふ奴が何一つわかつてないんだから困る。」

と、呟いたといふ事だ。だが、それはトルストイが無理なので、學問の餘り賴みにならないのは、何も醫者の方にのみ限つた事ではない。

病氣は重くなる一方だつたので、ロスチャイルドは床のなかで神經を針鼠のやうに尖らせて口癖のやうに、

「今度こそいよいよお暇乞だ。」

と呻き通してゐた。醫者は例のやうに叮嚀に診察をしたが、自分の診察の屆かないところはお世辭を使ふ外に仕方がないといふ事をよく知つてゐたので、

「御前、大丈夫でございます。この御容體ぢや百歲まで吃度お請合が出來ます。」

と言つて、てれ隱しにお辭儀を一つした。

「百歲まで。」名高いこの資本家は、それを聞くとむつくり頭を持ち上げた。「それは大變な損だよ。神樣がそんな御損な算盤をお持ちになるといふ法はない。七十五で取引の出來るものを百まで出すなんて……」

大切な自分の生命までを、戰時公債なみに取扱つてゐるのは、いかにも資本家らしくて面白いが、それよりも感心なのは、神樣の勘定高いのを、ちやんと見ぬいた所にある。

慈善家の心得

鎌倉の圓覺寺に、誠拙和尚といふ坊さんがゐた。あるとき三門を拵へようとして、弘く佛縁のある人達から寄進を募つた。すると、その頃札差をしてゐた梅津傳兵衛といふ男が、心ばかりの寄附につきたいからといつて和尚を訪ねて來た。傳兵衛は膨らんだ懐中から、嵩高な金包を取出して和尚の前に置いた。

「和尚様、ほんの聊かではござりまするが、ここに金子が五百兩ござりますから、今度の三門の御建立へ是非お加へおき下されまするやうに。」

和尚はちらと金包を見たが、

「ああ、さうかい。」

と言つたきり、すぐに眼を外つ方に逸らした。

傳兵衛は不平で堪らなかつた。五百兩といへばなかなかの大金で、これだけあつたら女一人の靈魂を買ふ事も出來るし、男の運を買ふ賭博をも打つ事が出來るのだ。それを知らない和尚でもない筈だ、と傳兵衛はかう思ひながら、わざと覗き込むやうに和尚の顏を見た。

「ほんのぽつちりではござりまするが、五百兩だけ御寄進申上げまする。」

「さうか、よしよし。」

和尚はまた一言言つたきり、やはり外つ方を向いて素知らぬ振りをしてゐた。

傳兵衛はいくらか腹に据ゑかねた。いくら出家の身とは言ひながら、他人から寄進を貰つて、あの素振りは蟲がよすぎる。五百兩といへばかなりの大金だ。自分がこれだけの金を儲けるには、額に珠のやうな汗も流した。嘘も幾度か吐いた。それを今惜しげもなく寄附しようといふのだ。和尚はそのお禮として、來世で自分に特別上等の居所を取持つてくれる程の信用はないにしても、今少し叮嚀な挨拶があつてもよかりさうなものだ。傳兵衛は言葉に角を立てた。

「和尚様、五百兩と申しましたところで、當山におかせられましては何のお役にも立ちます

まいが、私にとりましては、聊か身分に過ぎた寄進かと存じまする。就きましては何か一言の御挨拶を下されましても……」

「禮が言つて欲しいと言ふのか。」

こちら向きに向き直つた和尚の眼は、蠟燭のやうに光つた。

「御意にござりまする。」

傳兵衞は木兎のやうに頰を膨らませた。

「馬鹿な。お前が善根をするのに、なぜまたわしが禮を言はんければならぬのか。」

和尚の聲は挽臼のやうに上から落ちかかつた。傳兵衞は疊に顏をすりつけてゐた。

落錢を拾ふ樂しみ

「世の中に何が嬉しいといつたつて、途で落したお鳥目が、自分の手に還つた時ほど氣持のいいものはございません。お上人樣は御存じでいらつしやいますか。」

かういふ話を良寛上人にしたものがあつた。上人は言ふまでもなく、越後國上山の五合庵に住んでゐた名高い禪僧である。

この話をした男だつて、世の中には外にもつと嬉しいことがたんとあるのは知つてゐたらしいが、行ひ澄ました良寛に、そんな話も出來なかつたものだから、精々落した鳥目くらゐで濟ます事にした。

良寛はそれを聞くと、不思議さうな顏をした。そして汚れた巾着から散錢を二つ三つ取出してわざと路の上に落した。お鳥目はかちんと音を立てて、上人の足もとで二三度くるくると舞つた。

良寛は手を伸ばしてその散錢を拾つたが、格別變つた氣持もしなかつた。

「一向嬉しくない。どうしたわけぢやらう。」上人は呆けた顏をしてじつと考へ込んだ。「もつとたんと落さなくちやならないのかしら。」

先刻から上人の素振りを見て、馬のやうにやにや笑つてゐた男は、ちよつと小腰をかが

めた。

「お上人様、今一度試してみて下さい。さうしたら吃度お判りになるだらうと思ひます。」

良寛は巾着に入れかけてゐた散錢を取出して、また路の上に落した。散錢はお上人に當てつけたやうに、その邊をころころ轉げ廻つてゐたが、いつの間にか草のなかに滑り込んで、そのまま姿を隱してしまつた。

良寛は手を伸ばして、そこらを捜し廻つたが、烏目は一向顏を見せなかつた。僧侶(ほう)さんはうろたへ出した。禿げた頭を蕃茄(トマト)のやうに眞赤にして、草のなかを搔き分けてゐたが、暫くしてやつとこさで見つかつた。上人は汗ばんだ顏を持ち上げた。

「なるほど嬉しかつたよ。ほんたうに嬉しいもんだな。落した錢を拾ふといふものは。」

胃の腑

むかし、松平不昧公が京都に上つた時、ある日の事、茶人千宗左を訪れようとして、前以てその由を通じておいた。宗左は相手が不昧公だといふので、色々趣向を凝らした午餐の用意などしておいた。――一體茶人の料理といふものは、味よりも趣向のもので、趣向さへ氣に入つたらお膳のものは言ふに及ばず、皿を食べ、椀を食べ、おまけに亭主役の禿頭を食べたつて少しの差支もないのだ。

不昧公は千家へ行く途中で、急にその日は大德寺に寶物の蟲干がある事を思ひ出した。

「さうだ、蟲干を觀に行かう。宗左へは歸り途にしたつて遲くはあるまい。」

不昧公は先に大德寺の方へ廻ることにした。蟲干には色々珍しい物があつたので、この風流大名は思はず時を過した。寺の門を出たのは正午も大分過ぎてゐて、ぺこぺこになつた胃の腑のなかでは、先刻蟲干で見た吳道子の觀世音や、一休和尙の木像が空腹(ひもじ)さうに欠伸をしてゐた。

千家では、また宗左が欠伸ばかりし續けてゐた。不昧公が着いたのは、欠伸が中つ腹と變つてゐた時なので、前々から凝らした饗應の趣向も、すつかり臺なしになつてゐた。亭主は

お客を茶席へ通すと、薄茶を一服出したままで、素知らぬ顔をしてゐた。腹の空いた大名は次の室の物音にじつと聽耳を立ててゐたが、別段膳部を用意するらしくもなかつた。

不昧公の胃の腑は深く宗左を怨んだ。これまで空腹といふことを知らなかつた大名の頭腦は、急に胃の腑の味方をして、何かしら復讐の趣向を考へるらしかつた。

その翌る年、不昧公は江戸の邸へ宗左を招いた。宗左は名高い大名の折角のお招きだといふので、出來るだけ供をたんと連れて、供には挾み箱や長刀なども擔がせた。そして大威張りで海道筋を練り歩かせたものだ。

不昧公は江戸の邸で遙かにその噂を聞き傳へた。胃の腑はいつぞやの復讐の時が來たのを思つて小躍りした。不昧公は用人を呼んで、何かしら言ひつけた。用人は急いで品川の宿まで出掛けて行つて、茶人の一行を待ち受ける事にした。仰々しい宗左の行列が來かかると、松平家の用人は蟲斯(はつた)のやうに表へ飛んで出た。そして不昧公からだといつて大きな金包を宗左の鼻先に突きつけた。

「折角お招きは致したが、殿は俗腹(ぞくはら)のお點前(てまへ)はもう厭になつたと仰せらるるによつて、お氣の毒ではござるが、ここからお歸り下さるやうに。」

かう言つて、用人はさつと引上げてしまつた。宗左は化かされたやうな眼つきで、いつまでもその後姿を見つめてゐた。

何事も胃の腑から起きた事だ。胃の腑からはどんな事でも起きるものだ。

獨帝の拳骨

戰爭になつてから、さう暢氣な事も出來まいが、伯林の市中では、いつも大晦日の夜は市街を歩く人達が、出合頭に誰彼の容赦はなく、いきなり拳を固めて帽子の頭をぽかりと擲りつける事が行はれる。

今の獨帝は人一倍この遊びが好きで、皇帝の位に卽いてからも、大晦日の晩になると、こつそりお忍びで市街へうかれ出し、擦れ違ひざまに他人の隙を見てはぽかりと擲りつけたも

のだ。

誰彼の容赦なく、他人の帽子を擲りつけるといふのは、年中頭ばかり下げて暮してゐる人達にとつて、實際胸の透く遊戯に相違なからうが、獨帝のやうに、朝から晩まで内閣の大臣達にお辭儀をさせ通しにさせてゐる者は、もつと外の遊びを好いてもよかりさうなものだ。

しかし、獨帝は好きな事をするのに、誰に遠慮は持たない性分である。その上一つ間違つたら、相手から自分の帽子を擲りつけられるといふ心配があつてみれば、獨帝はどうしてもこの遊びを捨てるわけにいかなかつた。

ある年の大晦日の晩、獨帝はいつものやうにお忍びでこつそり市街へ飛び出した。明るく灯の入つた市街には、自分の頭を庇ひ立てるやうにして、尻目に他人の帽子を覗つてゐる人達がうようよしてゐた。獨帝は急ぎの用事でもあるらしい顔つきで、そのなかに紛れ込んで行つたが、擦れ違ひざまに、牛のやうな呆けた顔の男を見ると、いきなり拳をあげてぽかりと帽子を叩きつけた。

その瞬間、獨帝は眞青になつて、帽子から拳を引き外した。見ると、白い手首に眞紅な血

がたらたらと流れてゐる。獨帝は恨めしさうにその男の帽子を覗き込んだ。帽子の山からは釘が二三本頭を突き出してゐた。その男は釘仕掛を發見(みつけ)られると、慌てて帽子を脱いで小脇に抱へ込んだ。そしてセルロイド製のやうな禿頭をふりふり群集に紛れ込んだ。

獨帝はぶつぶつ呟きながら宮城に引きかへした。そして侍醫の鼻先に血だらけな拳骨をぐつと出して見せた。侍醫は叮嚀に繃帶をした。

天國に結婚のない理由

結婚といふ事は、人間のする仕事のうちでは、あまり立派なものではない。あれは賭博や編物などと同じやうに、ほかに何も仕事のない時にするほんの閑潰しで、歌を詠むとか、畫を描くとか、そんな結構な仕事を知つてゐる人達にとつては、結婚など成るべくしない方がいい。だから、基督も天國では「娶らず、嫁かず」だと言つてゐる。天國のやうな結構ずく

めなところでは、結婚は賭博と一緒に御法度となつてゐるのだ。

説教家としては、米國で第一人者と言はれたビイチヤアが、あるとき教會で得意の説教をした。説教はいつに異らず面白く出來たので、ビイチヤアは上機嫌で教會を出ようとした。

すると、それまで出口に衝立つてゐた妙齢の美しい娘が、ちよつと會釋をしてこの説教家を呼びとめた。

「先生、ちよいとお伺ひ致しますが――」娘は嬌へたやうな身振りをした。「天國には結婚が無いやうに福音書に書いてありますが、あれは本當なんでございませうか。」

ビイチヤアはじつと娘の顏を見つめた。娘はチヨコレエトよりもお芝居よりも、一番「結婚」が好きらしい口もとをしてゐた。

「ほんたうですよ。天國には結婚なんてものはありません。」

「何故でございます。」

娘はこの世で結婚をした上に、天國でも今一度結婚をしたさうな口振りで訊きかへした。

「それは、何でせう――」と牧師は皮肉な返事をした。「天國には女といふものが居ないからでせうて。」

「天國には女が居ませんて――」娘は軍雞(しゃも)の牝のやうにきつとなつて顏をあげた。「違ひますよ。先生。そんな理由で天國に結婚が無いんぢやございますまい。」

「ぢや、どんな理由で？」雄辯な牧師は覗き込むやうにして訊いた。

「それはね、かうなんですよ。」と娘は白い齒を見せてきつぱりと言つた。「天國ではお嫁入しようにも肝腎の式をあげて下さる牧師さんなんて方は、一人も居ないからなんでせうよ。」

接吻か二十弗か

メリー・ガアデン嬢といへば今は巴里に住んでゐる米國で名うてのプリマ・ドンナだが、あるとき劇場の稽古場で、大事の寶を失くしてしまつた。

メリー・ガアデン嬢が失くしたのは、大粒の眞珠であつた。嬢は血眼になつて捜したが、

かいくれ分らなかつた。で、一座の者に申渡しをして、眞珠を拾つてくれた者には、接吻か二十弗か、どちらかをお禮にしようといふ事に取決めた。

「接吻がして貰へる……」

皆は熱病を患つたやうな眼つきをして稽古場を捜し廻つた。すると、年の若い道具方の一人が小道具の中で件の眞珠を見つけた。女優はにこにこものでそれを受取つて身につけた。

「有難う。お禮はどちらにした方がいいの。接吻？」女優は美しい眼で道具方の顏を見た。化粧石鹼でよく洗つた上に、香水でも振りかけなければ、とても接吻が出來さうな顏ではなかつた。「それとも二十弗の方にするの。」

「へ、へ、へ……手前接吻は大の好物なんでげすが……」道具方は、薔薇のやうな女優の唇を見て狗のやうに卑しい眼つきをした。「でも、お腹には代へられやせん。二十弗の方を戴きやせう。」

それから二三日經つて、メリー・ガアデン孃は、富豪のアンドリウ・カアネギイに出合つてこの話をした。

「道具方め、若いに感心な男ぢや。」カアネギイは美しい女優の唇にちらと眼をやりながら言つた。「二十弗受取つてみれば、この後接吻するにしても、精々大事にしませうからの。」

カアネギイは良い事を知つてゐるが、しかし道具方はもつともつと良い事を知つてゐたのだ。それは二十弗あつたら、接吻と、酒と、今一つ料理をさへ味はふ事の出來る安値な世界がこの世の中にあるといふ事である。

十六人の女房

結婚といふものは不思議なもので、一度で靈魂まで黑焦にして懲り懲りするのもあれば、性懲りもなく幾度か相手を更へてゐるのもある。ソロモンは一代のうちに數へきれぬ程の女と緣を結んだといふが、あの通りの賢者の事だから、訊いてみたら色々面白い話を聞かせてくれたに相違ない。

佛蘭西のボルドオにジエエムス・ゲイといふ男が住んでゐた。何一つ立派な仕事は殘さなかつたが、一代のうちに十六人の女房を持つたといふので、かなり世間の評判になる事が出來たのはとんだ幸福であつた。

ある物好きの男が、ゲイに會つて訊いた事があつた。

「そんなにたんと奥さんをお持ちで、よく飽きませんでしたね。私などはたつた一人しか持ちませんが、それでも少し持ち過ぎたやうに思ふ事が度々ありますよ。」

すると、ゲイは急ににこにこして、

「滅相な、女は一人一人みな別物ですよ。一人で懲りたからと言つて、ほかの幾人もがさうだとは限りません。つまり女房をたんと持つのは、書物をたんと讀むのと同じで、色々の知識を得るといふ事でさ。」

と、答へたといふ事だ。

そのゲイ爺さんは百一歳の時、十六人目の女房に亡くなられて、こつそり十七人目の後添を貰はうとしたが、親類緣者の者に留立てせられて、ぶつぶつ呟きながら、漸く思ひとまつ

たといふ事だ。爺さんに取つてこれは面白い新刊小說を讀み損ねた氣持がしたに相違ない。

英吉利に十二人の女房と十三度結婚したといふ不思議な男がある。一番目の女房はその男を捨てて若い戀人と駈落したので、男は涙を流してその女の噂ばかりしてゐたが、程なく二度目の結婚をした。そして次から次へと結婚と葬式とを繰返して、十一人目のお葬ひを出したのは、丁度八十四の夏だつた。それから爺さんは縹緻よしの寡婦婆さんと結婚したが、實を言ふと、その婆さんは一番目の女房なので、婆さん自身は同じ男と二度目の結婚だとはよく知つてゐたが、爺さんは何にも氣づかないで、始終にこにこしてゐたさうだ。

俳諧師の頓智

いつの頃だつたか、ちよつとはつきり判りかねるが、長崎に素行といふ俳人があつた。至つて行脚好きで、閑さへあれば暢氣に旅に出歩いてゐた。そのむかし、芭蕉は頭陀袋に杜詩

と山家集と普門品とを入れてゐたさうだが、素行の貧しい懐中には、いつも俳諧七部集が一冊捩ぢ込んであるに過ぎなかつた。

ある時、田舎道で日を暮した事があつた。ちやうど冬の最中で、寒さは無遠慮に俳諧師の背筋から懐中から入つて來た。素行は泣き出しさうな顔をして野路を急いだ。すると、やつと一軒の百姓家が見つかつた。俳諧師は石のやうに冷い拳をあげて門の戸を敲いた。

戸はなかからあけられて、襤褸(ぼろ)つ切(きれ)のやうな皺くちやな媼さんが、闇のなかからうつそりした顔を出した。

「旅の者でござる。申しかねるが、一夜の宿をお借り申したい。」

素行は木の葉のやうに寒さうに身體を顫はせた。媼さんは闇を透してうそうそ旅人の容子を嗅ぎ分けるらしかつた。

「坊さんかの。坊さんならお泊め申すほどにの。」

媼さんは口のなかで呻くやうに言つた。

俳諧師はそれを聞き逃さなかつた。

「さうとも、さうとも。わしはその行脚坊主ぢや、坊主ぢや程によろしく頼む。」

早口にかう言ひながら、媼さんに安心させるやうに頭巾を取りのけて見せた。なるほど頭は圓かつた。

素行は奥へ通されて、先づ佛壇の前に坐らせられた。媼さんは亡くなつた爺さんの回向が頼みたかつたのだ。俳諧師はてんで經文を知らなかつたので、ひどく當惑したらしかつたが、ふと氣づいたのは懐中の七部集であつた。彼は勿體ぶつた手つきでこの集を取出した。そして作者の名前を初めから順々に讀み下した。

「其角、嵐雪、去來、丈草、野坡、杉風、北枝、凡兆、支考……」

かう唱へながら、時々思ひ出したやうに鉦を鳴らしたものだ。媼さんはお蔭で亡くなつた爺さんが淨土に生れ代つたもののやうに涙を流して喜んだ。そして温かい粥と温かい夜着とを惠んでくれた。

これを讀んで、くすくす笑ひ出さない僧侶が今幾人あるだらう。彼等も皆同じやうな事をしてゐるのだ。

寄附金の請取

紐育の新聞記者フランシス・ロイプが、先年亞米利加印度人の調査委員をしてゐた頃、ある日のこと、見も知らぬ印度人が、その事務所にひよつくりと蒐色の燒栗のやうな顏を出した。そしてポケツトから錢包を取出して、卓子の上に置いた。

「ここに五十弗ありますから、お請取りを願ひます。」

印度人は反身になつた。その金は公用金としてロイプが請取るべき筈のものだつた。

ロイプはその金をあらためた。そして確かに請取つた由を言つたが、印度人は何か待心でゐるらしく、兩手を胸に拱いたまま、卓子の前に立ち跨かつて、一向歸らうとしなかつた。

「何か外に用でもあるのかね。」ロイプは燒栗のやうな顏を見上げた。

「請取證を待つてるんです。」印度人は厚い唇のなかから呟くやうに言つた。

「なんだつて請取證なんかが要るんだね。」ロイプは口を尖らした。「君は私があとからまたこの金を請求しやしないかとでも思つてるのかい。」

印度人は肩を聳やかした。

「私は耶蘇信者なんです。いつかは吃度神樣にお目にかかるでせうが、その折彼得(ペテロ)は私を天國に上げる前に、この五十弗の請取證を見せろと言ふにきまつてゐます。その折請取證が要るからといつて、まさか地獄のなかを捜し廻るわけにもいきませんからね。」

「請取證を取るのに、なんだつて地獄の中を捜し廻らなければならんのだね。」

ロイプは不思議さうに訊いた。

「でも、貴方がたが地獄に墮ちなくつて、誰が墮ちるんです。」

ロイプは鐵瓶のやうに湯氣を立てて怒り出したが、それでも請取證を書くには書いた。印度人はそれを持つてのつそりと出て行つた。

骸骨の議員

カンサス出の米國上院議員に、インガルスといふ男がゐる。爪立ちしたら天國にでも手がとどきさうな背高で、おまけに酷い痩つぴいだが、それでも地面の事が氣になるかして、いろいろ郷里の事に骨折るので、カンサスでは評判のいい男である。

この男の近所に、大の仲よしの醫者がゐる。インガルスとは打つて變つて肥えた男で、診察のひまひまには、靜かな書齋でエマアソンの論文を讀むのが何よりも好きであつた。ところが困つた事には、この醫者がエマアソンを讀まうとすると、きまつたやうに其處へ飛び込んで來て邪魔立てする者がある。ほかでもない、ちんぴらの新聞賣子で、醫者とエマアソンとの知らない色々の事が載つてゐる新聞を押賣りに來るのだ。醫者はそれが蒼蠅くて仕方がなかつた。

ある日の事、インガルスは醫者の診察室に背高な身體を現した。別に心臟が悪くなつたので診察を頼みに來たわけでもなかつた。米國では心臟はオペラ袋同樣女の持物になつてゐるので、背高の議員はそんな物は持つてゐなかつた。醫者は友達の顏を見ると、例のやうに新聞賣子がうるさくて、しみじみエマアソンが讀めないのが何よりも殘念だとこぼした。

ところへ、又しても新聞賣子の入つて來るらしい跫音が聞えた。醫者は早速の氣轉で押入から標本用の人間の骸骨を引張り出し、それをちやんと椅子に腰かけさせて、自分達は何食はぬ顏で次の室に隱れてゐた。

新聞賣子は扉をあけて、勢よく診察室に入つて來た。そして毎日の事なので、あたりに氣をつけないで、卓子の前までやつて來た。見ると、いつもの椅子には、肥えた醫者の代りに骸骨が一人腰をかけて、窪んだ眼で新聞賣子を見詰めながら、白い齒をむき出しにけらけら笑つてゐた。賣子は聲を立てて泣き泣き外へ飛び出した。

醫者は腹を抱へて笑ひこけた。眼からは涙さへにじみ出してゐた。背高の上院議員は流石にかはいさうになつて、後を追つて表へ出た。そして御機嫌取りに賣子の手から新聞を一枚

買ひ取らうとした。賣子は首を振つて、どうしても新聞を呉れようとしなかつた。

「そんなに着物を着たつて欺されるもんかい。」賣子は相手を見上げて、べそをかきながら言つた。「たつた今骸骨の所を見ちやつたんだもの。」

博士と小學生徒

詰込み主義の鸚鵡流の教育では、日本の學校はどこにも負(ひけ)を取らないが、何事にも自由な米國でも、教育だけはまた別だと見えて、近頃かういふ話があつた。

ある小學校の校長は、毎朝課業の始まる前に、きまつたやうに生徒を講堂に集めた。そして小高い教壇の上に鉛筆のやうに眞直ぐに衝立ちながら、咽喉一杯の聲を張上げて訊いたものだ。

「皆さん、あなた方はかうやつて大勢講堂に集まつてゐますが、萬一ふとした事で、この建

物から火が出た時にはどうしますか。」

なるほど學校の建物は、校長が火を氣づかふやうに粗末な安普請で、そこらの柱などは傻麻質斯でも患つてゐるらしく、イヒチオウルのやうな茶色の藥液で塗つてあつた。

それを聞くと、生徒は讃美歌でも歌ふ折のやうに、一齊に聲を揃へて返辭をした。

「先生、私どもはみんな腰掛から立ち上ります。そして一先づ廊下に出て、遽てないで順々に外へ逃げ出します。」

校長は滿足さうにぐつと顎をしやくつた。彼はかういふ風にさへ教へて置けば、いつどんな事が起きても、生徒は滿足に避難出來るものだと信じてゐるのだ。

ある日の事、その學校へヴアン・ダイク博士が訪ねて來た。博士は聞えた文學者だといふので、校長は生徒のために短いお話を頼んだ。

ヴアン・ダイク博士は、いつも校長が鉛筆のやうに衝立つてゐる教壇に立つた。そして落着きのある聲で言つた。

「皆さん、私は博士ヘンリ・ヴアン・ダイクといふ者です。私が今ここに立つて皆さんのた

めにお話をすると言つたら、皆さんはどうしますか。」

博士はかう言つて、慈愛の籠つた眼で、じつと生徒達を見おろした。

生徒は家鴨のやうにぎやあぎやあ聲を揃へて答へた。

「先生、私どもはみんな腰掛から立ち上ります。そして一先づ廊下に出て、遽てないで順々に逃げ出します。」

ヴアン・ダイク博士はそれを聞くと、傴麻質斯に罹つたやうに痛さうに顔をしかめた。教壇の下では、校長が火事に出會したやうに、眞赤になつて顫へてゐた。

卵を一つ

ある時、發明家のトオマス・エディソンの實驗室を、若い婦人客が訪ねて來たことがあつた。すべて天才の事業を認めて、心よりそれを崇拜するものは、男よりも女に多いものだ。

こんな時に、男はどうかすると、嫉妬に驅られて、けちを附けたがるものだが、女は割合に素直な心を持つてゐる。

エディソンは美しい女客の爲に、自分が今實驗に取りかかつてゐるいろいろの仕事を解り易く說き聞かせた。丁度夏の午前の事で、女客は顏の汗を拭き拭き感心したやうに幾度か首を振つて聽き惚れてゐたが、暫くすると發明家に訊いた。

「承つてみますと、何もかも結構づくめですわ。これまで先生には、こんなに幾つもの立派な發明をなすつていらつしやりながら、まだ何かしら仕遂げてみたいと思つていらつしやる事業がおありになりませうか。」

「有りますともさ。」發明家は女客の顏をじつと見かへした。「もしか貴女が誰にも洩らさないつて事を約束して下さると、私が取つて置きの希望をお話してもよい。」

「お約束致しますとも。吃度誰にもお話し致しませんわ。」

若い女客はいくらか顏を赧らめながら、身體を乘り出すやうにした。女にしてみれば、この偉い發明家が何かしら内證事を自分にだけ打明けて呉れるといふ事が、何よりも嬉しかつ

たのだ。「私承る事が出來たら、それが一日も早く成功するやうに神様にお願掛(くわんかけ)しますわ。」「有難う。厚くお禮を申しておきます。」エディソンは眞面目な口を利いた。そして他人に立聽きでもされるのを氣づかふやうに、いくらか聲を落して言つた。「私のやつてみたい事はね、御覽なさい、那處(あそこ)に煽風機が廻つてるでせう……」と部屋の隅つこにある煽風機を指ざした。「あいつに卵を一つ投げつけてみたいんです。唯それだけです。」

十二種の新聞を讀む小僧

今はむかし、米國のアイオワ州、パノラの町の或る銀行支店に給仕を勤めてゐた十五歳ばかりの少年があつた。おそろしくこまめな性質で、朝早く起きると直ぐに床の掃除をする。掃除が濟むと、今度はせつせと雜巾がけをする。それから煖爐を焚きつけ、窓硝子を拭き、眞鍮製の欄干を拭き込む。拭いて拭いて重役の頭のやうにぴかぴか光り出すまでは少しも手

を休めない。

室のなかの掃除が濟むと、給仕はいきなり表へ飛び出して、街路を掃除する。雨あがりの路に水溜りが出來てゐると、附近の土を平らげてそれを埋め合はせ、町の人の通り易いやうにする。かうしてせつせと働いて、一週に三弗の給金を貰ふ外には、別に誰からお禮を言はれるのでもないが、給仕は少しも不足の顏を見せなかつた。

その一週三弗の給金で、給仕はいつも素晴しい買物をすることにきめてゐた。素晴しい買物といふと、算盤高い今の人は直ぐ船株か、鶏の卵かを聯想するかも知れないが、給仕の買つたのはそんなけちな物ではなかつた。亞米利加のいろんな市から出る週刊新聞の主だつたもの十二種ばかりだつた。

「なんだつて、そんなに週刊新聞ばかり買ひ込むのだね。」

ある時、同じ銀行の貯金係がかう言つて訊ねると、給仕は悧巧さうな、くるくるした顏をあげた。

「廣い世界のいろんな事が知りたいからなんです。パノラの町は私にとつては餘りに狹すぎ

るんです。」

夕方銀行の仕事が濟むと、給仕は自分の室へ入つて、その十二種の週刊新聞に氣も心も吸ひ取られたやうにじつと讀み耽つたものだ。そして狹いパノラの町で、どんなことが起きようが、それには少しも頓着しなかつた。

給仕は成長(ねびき)くなるに連れて、ぐんぐん出世をした。タフトが大統領をしてゐた頃、この給仕を大藏省の祕書に拔擢しようとしたが、給仕は首を振つて承知しなかつた。その人こそシカゴの有名な銀行家ジオヂ・レイノルヅで、今では紐育の銀行を除いては、米國第一の大資本を持つてゐるシカゴ某銀行の頭取である。

氣取屋の婦人

米國は華盛頓市のWIといふ名高い料理屋に、ある日の事、孔雀のやうに盛粧(めか)し込んだ婦

人が入つて來た。入口の扉の側に立つてゐたのは、折目の正しい、仕立おろしの流行服を着込んだ紳士だつた。婦人は尻目にじろりと紳士の顏を見ながら言つた。

「どこか窓に近い小卓はありませんか。」

紳士はそれを聞くと、默つて婦人を連れて窓際の小卓に案内した。卓の上には眞紅な花が酒のやうな甘つたるい香を漂はしてゐた。紳士は眞新しい白い手帛で椅子の埃をはたき、そこらに散らばつてゐる麵麭屑を拂ひ落したりした。手帛はその朝紳士の細君が、恩に被せながら簞笥の底からわざわざ取出して呉れたものだつた。

叮嚀な紳士が小卓の側を離れようとすると、婦人は獻立表を手に持つたまま、女王のやうな氣取つた聲で呼びとめた。

「ちよいとお待ち、この店は何が自慢なの。」

「さあ。」紳士はちよつと額へ手をやつた。「何よりもスウプがうまいんですがね。」

孔雀の女は默つて頷いてみせた。あまり頤をしやくり過ぎたら、損のいくやうな頷き方である。

「ビフテキもちよつと食べられます。」紳士は自分が何よりもビフテキが好きなのを忘れなかつた。

「成程ね。」婦人はにこりともしなかつた。

その瞬間、紳士はいつものものを思ひ出した。女といふ女が、戀人よりも、新聞小說よりも、好きな馬鈴薯である。

「それから馬鈴薯料理もなかなかうまく食べさせますよ。」

「さう、結構だわね。」

あまり取澄ましたロの利き方なので、紳士はたうとう腹を立ててしまつた。

「奧さん。それからこの店には今一つ自慢のものがありますよ。それは紳士と給仕との見さかひのつかないお客が偶に來るといふ事です。」

紳士は捨臺辭を投げつけて置いて、鄭重にお辭儀をして出て行つた。紳士とは誰あらう、イリノイ州の上院議員ジエエムス・ハミルトン・レキスであつた。

女形の心得

むかし、翫雀歌右衞門が、女形をする心得を言ひ遺した事があつた。それによると、女形はすべて膝がついてゐなければならない。何よりも大事なのはこの膝で、そして手元を柔かにしてゐれば、そのまま女になりきる事が出來るのださうだ。濱村屋菊之丞といふ女形が、木挽町で菅原を演つたとき、覺壽と梅王と千代との三役を勤めた事があつた。梅王には車曳のくだりで兩臂を張り、手先を肩に預けないやうに腕を組んで、

「喰ひふとつた時平どんの尻こぶら、二つ三つ……」

と、左手の拳で右の腕を打つところがある。それを菊之丞がどうするかが幕内の面白い問題となつてゐた。

といふのは、その頃は女形のつつましい口からは、屁といふやうなはしたない言葉は夢に

も言つてはならない事になつてゐた。ところが、菊之丞は稽古の時、そこへ來ると、急に聲を落して何か譯の分らぬ事をくどくどと言つてごまかしてゐた。

「何を言つてるのだらう、芝居が開いてもあんなぢや困つてしまふが。」

皆は寄々その事を話して氣づかつたものだ。すると、初日の幕が開いた。待ち設けた車曳となつた。皆は身體ぢゆうを耳のやうにして、その臺辭を待つた。菊之丞は叫んだ。

「時平どんの御面相二つ三つ……」

皆はやつと安心して、ほつと息をついた。

大阪俳優のうちで女形として第一流といはれる中村福助が、去年淀川に土手切れがあつた當時、清荒神から大勢の贔員客と一緒に、大阪歸りの電車に乘込んだ事があつた。電車が十三と三國との間に來ると、出水はもう軌道を浸してゐて、車は鳥のやうに聲を立てながらおつかなびつくりに進むよりほかに仕方がなかつた。福助は物珍しさうに窓に顏を押しつけて、夜目に氣味惡く光る水の面を眺めてゐたが、ひよいと連れの男を振返つたかと思ふと、

「どうだす、これが砂糖水やつたらよろしおまんのになあ。」

と、舌嘗めずりをしながら言つてゐた。

帝劇の尾上梅幸が、芝居がはねてから夜遲く友達と一緒に外濠を歩いてゐた。空には星が瞬きをしてゐた。梅幸は立ちどまつてじつとそれに見とれてゐたが、しみじみと思ひ込んだやうに、

「あれが、みんなダイヤだつたらなあ。」

と、獨言のやうに言つたといふ事だ。

梅幸も、福助も、さすがに女になりきつてゐる。値安で成るべく好い物を手に入れたいと思つてゐる點において。

賣子娘

名高い紐育の百貨店ワナメエカアの手套部に、近く入つて來た賣子娘があつた。ある日の

こと、婦人の得意客に手套を一つ賣つた後で、今度は直ぐ側に立つてゐる紳士の方に振向いた。

「いらつしやいまし。何か御用のお品でも……」

「羊皮の手套を一つ。」

賣子が取出した品を受取りながら、紳士は言づた。

「こんな事を言つても、氣に障へて貰つては困りますが、先刻の婦人に對するあなたの應對振りはまだ十分とは言へなかつたやうですね。あの方はあなたの出やうによつては、もつとお需めになつたかも知れませんよ。」

賣子娘は酸つぱい物を嘗めさせられたやうな顏をしたが、それでも負けてはゐなかつた。

「あなたはお客扱ひがお上手でいらつしやるやうですね。なんならここで誓くお手本を見せて戴けないでせうか。」

「よろしい、承知しました。」

客はかう言つて、吃驚する娘に頓着なく、すつと帳場に入つて來た。そして身輕に外套と

帽子とを脱ぎざま、今入つて來たばかりの婦人客の方へ愛嬌のある顏を振向けた。

「毎度御贔屓に預かりまして……今日は何か……」

「あたし洗濯の利く白手套が欲しいんですが……」

紳士は賣子娘に白手套のしまつてある棚を訊いた。そしてその中から二組の品を持ち出して來た。

「いかがでございませう、このお品では。それからお洗濯なさいます間、別なのがお入用だと存じますが。」

「さうね、ぢや二つ戴きませうよ。」婦人客は白手套の二品を購ひ取つた。

「今一つこんなのを御覽に入れたいと存じますが。」紳士は先刻の棚から別の手套を持ち出して來た。「御覽の通り、これは鼠色でございますが、晝興行やお寺詣りにはこの方がお似合ひかと存じまして。なんならこれも二品ばかりお持ちになりましては。」

婦人客はその鼠色の手套をも、言ひなり通り二つ購はされた。たつた一つの手套が買ひたさに店に入つて來たものが、出る時には四つの手套を提げてゐた。それもほんの十分間の出

來事に過ぎなかつた。

お客が歸つて行くと、賣子娘はすつかり感心したらしく言つた。

「まあ、お上手だわね。貴方。これまで吃度どこかの賣子だつたんでせう。そしてこのお店へ雇はれたくつて、今日いらしつたのぢやなくつて。」

「さうかも知れません。」

紳士は外套と帽子とを受取りながら言つた。そして紙入から自分の名刺を取出して娘に與れてやつた。それを見ると、娘は仰天して酸漿のやうに眞赤になつた。紳士は紛ふ方もないワナメエカアの主人だつた。

詩人の健啖

話はずつと舊くなるが、伊太利の詩人ダンテが、ある時カアネ・デラ・スカラ家の食事に

招かれた事があつた。

ダンテは好いお客だといふので、わざわざその家の主人と子息との間に坐らせられた。その頃の食事には、主人も客も食べ殘りの骨を卓子の下に打捨(うつちや)つておく習慣があつたので、惡戯好きのカアネ親子は、目ざとい詩人に氣づかれぬやうに、自分達の皿の骨は言ふまでもなく、他のお客のをまで、そつくりその儘そつとダンテの足もとに捨てておいた。

さて食事が濟むと、主人は初めてそれに氣づいたやうに皆の顏を見た。

「皆さん。私はダンテ君の胃の腑が、馬のやうに御丈夫なのにすつかり驚いてしまひました。お疑ひになるならあれを御覽下さい。」

主人はダンテの足もとを指さした。皆は卓子の下を覗き込んだ。そこには食べ殘りの骨が山のやうに積まれてあつた。

「ほほう。驚きましたな。ではこれから一つ詩人の健啖を祝さうぢやありませんか。」

お客の一人が言ひ出したので、皆は立ち上つてダンテの胃の腑のために杯をあげようとした。

「お待ち下さい。皆さん。」ダンテは兩手で皆を押へつけるやうな恰好をした。

「あなた方は私の健啖なのに吃驚なすつていらつしやるやうですが、私はまた當家の御主人の胃の腑の廣いのに驚歎してゐるやうな始末で。御覽なさい――」と詩人は主人の足もとを覗き込んだ。「御主人の卓子の下には何一つ殘つてゐません。私はかうして骨だけは食べ殘しましたが、御主人はその骨までもすつかり鵜呑みにされてしまひました。」

皆は詩人の頓智のいいのに歎賞を惜しまなかつた。語を寄す。世上の健啖家、頓智さへあつたら、諸君は六人分の飯を食つたつて少しも差支ない。

詩人の握手

スキンバアンといへば英國の名高い詩人だが、その愛讀者の一人に、なんとかして一度この詩人と握手して、その心持を一生の思出にしたいと思つてゐた男があつた。

その男は、詩人が毎朝のやうに其邊の森へ散歩に出掛ける癖があるのを聞いてゐたので、度々ここぞと思ふところへ待伏せして、やつと一週間目に、かねて寫眞版で顏馴染のこの詩人が、向うからてくてく歩いて來るのに出會す事が出來た。その男は樹蔭から獵師のやうに飛び出した。そして慌てて帽子を脱いだ。

「ちよいと伺ひますが、あなたはスキンバアン先生ぢやありませんか。」

詩人は變な顏をして、ちよつとうなづいた。

「それぢや、どうか握手させて戴きませう。」

男は脂ぎつた掌を前に差出した。その掌は詩人と握手するよりも、熊と摑み合つた方が恰好だと思はれるほど大きかつた。

「うむ……」

詩人は呻くやうな聲をして、少し後退りをした。まるで見知らぬ男の掌に怖氣づいたやうだつた。その瞬間、件の男は詩人が聾だつたのに氣がついて、一段と聲を張上げた。

「先生、私はあなたに握手がして戴きたいばかりに、一週間ばかし毎日のやうにここでお待

ち受けしてたのでございます。」

「ああ、さうでしたか。」詩人はにこりともしなかつた。そして痩せた手を出して、その男の大きな掌を握つたが、その一刹那小娘のやうに心もち顔を赧くした。

「私はこんな事には一向馴れてないものですからな。」

話題

「近世雄辯學」の著者トオマス・リイドが、共和黨の闘士として米國の議會で鳴らしてゐた頃の事、ある日仲のいい友達と二人で、ボオトランドの或る倶樂部に行つた事があつた。

二人は外套室に外套を脱いで、かねて馴染の小ぢんまりした部屋に入つて行つた。そして香氣の高いココアを吸りながら、好きなおしやべりに語り耽つた。

リイドは無論好きな政治の事をたんと話したが、政治の話が盡きると、法律の話をした。

嘘ばかりで眞實の事がぽつちりしかない書物の事、男といふものを手帛のやうに掌で揉みくしやにする女の事――さういふ事柄について、次から次へと話を續けたが、たうとう話題が切れて、二人は立ち上つた。

もとの外套室に歸つて、めいめい外套を着込まうとする際、リイドの友達はポケットに手を突込んでゐたが、ちよつと不思議さうな顔をして、革表紙の大形の手帖をその中から引張り出した。

「どうしたんだらう。こんな見覺えのない手帖が僕の外套に入つてる。」

雄辯家は外套の袖に片手を突込んだまま、奴凧のやうな恰好をして言つた。

「誰か外の人が自分の外套と間違つて入れて置いたんだね。」

「どうしたもんだらう。」

「それはかうするんだ。まあ、君も一度外套を脱ぎ給へ。」リイドは先に立つてまた外套を脱いだ。「丁度話題が無くなつて歸らうとしてゐたところだ、折角だから、この手帖を持つて行つて、この中に書いてある事で今暫く話していかうぢやないか。」

二人は笑ひながら、また以前の部室へ後戻りをした。手帖にどんな事が書きとめてあつたかは私も知らない。

五十仙の損失

米國民主黨の政治家ブライアンが、こなひだ米國南部の或る市へ講演に出掛けた事があつた。汽車がその市へ着くと、ブライアンは幾年か前に自分がそこへ來て、講演をした事があるのを思ひ出した。

「どんな講演をしたか、思ひ出したいもんだな。」

この政治家は禿げあがつた前額を押へてじつと考へ込んだ。すべての講演家にはそれぞれきまつた出し物がある。知らないで、同じ土地で同じ出し物を繰返すなどは、あまり氣の利いた話ではなかつた。

自動車はこの政治家を乘せて、講演會のある大きな建物に走つた。そして廣々とした玄關前にぴたりととまると、ブライアンは以前の會場もやはりここだつたなと思つた。そこに衝立つてゐた門番の爺さんは、にこにこもので出て來て、叮嚀に白髪頭を下げた。

「これは、これは。旦那樣でいらつしやいますか。久振りにお目に懸ります。」

その瞬間、ブライアンの頭に一筋の光明が射した。で、この雄辯家は今日まで自分の方でも相手の皺くちやな顏をよく覺えてゐたやうな調子で話しかけた。

「お前も達者でいいな。確か以前私がここにやつて來た事があつたつけが、あれからずつとこちらに勤めてゐるのかい。」

「はい。よく覺えとりますでござります。」爺さんはまた頭を下げた。「あの頃からずつと引續いて勤めさせて戴いとります。」

「さうだつたか。ところで……」とブライアンは眩しさうな眼つきで爺さんの顏を見た。

「お前覺えてはゐなからうね、あの折私が此處で何をやつたかつて事を。」

「はい、はい。よく覺えとりますでござります。」爺さんは溶けさうな顏になつた。「旦那樣

はあの折、手前に五十仙下さりましてござりまする。」

ブライアンは仕方がなくポケットから五十仙を出して、爺さんの掌に載せてやつた――だが、以前の演題はたうとう思ひ出せなかつた。

文豪の娘

十九世紀の英國の作家のなかに、ジョン・ウイルソンといふ男がゐた。ブラックウッド雜誌に立て籠つて、クリストフア・ノウスといふ雅號で、何でもござれといつた風に、いろんな方面に得意の才筆を揮つた男だ。

そのウイルソンに美しい娘が一人あつた。女が妙齡になればいろんな男が訪ねて來るもので、この作家の應接間には、娘を目的の若い男が次から次へとやつて來た。そのなかに一人の若い大學教授が交つてゐたが、娘はこの男が氣に入つて嬉しい戀仲になつた。

大學教授はいよいよ結婚を申込まなければならぬ順序となつたが、殘念な事には、この學者は内氣なはにかみやで、他人の書物に書いてある事を紹介する折にも、顏を赧めないではゐられない程だつたから、自分の戀を打明けるには、酸漿のやうに心から眞赤にならないわけにいかなかつた。

「私には迚も貴女のお父樣にお目に懸る勇氣がありません。」大學教授は娘の家の應接間でもうすつかり赤くなつてしまつた。「どうか、貴女御自身で言つて下さい、後生ですから。」

「お父樣？　お父さまなら、今書齋にいらしつてよ、行つてらつしやいな。」

娘はいくらか調弄（からかひ）氣味に平氣な顏をして言つた。

「とても、とても。私がお目に懸つたら却つてとんちんかんの御挨拶をしてしまひますよ。」若い學者は深い溜息をついた。「貴女行つて打明けて下さい。私はここでお待ちしてゐますから。」

娘は笑ひ笑ひ父の書齋に入つて行つた。父は卓子に靠れて何か頻りと書きなぐつてゐた。娘は嬌へるやうに父の手をとつた。そして教授がたつた今自分に結婚を申込んだ事を話した。

「あの方は大層内氣でいらつしやるから、御自分にはお父様に申上げかねると――こんなにおつしやつてたわ。」

「さうか。そんな方だつたら、叮嚀に氣をつけて上げなくちやなりませんぞ。」作家は娘の顏を見ながら言つた。「それぢや、口づからもなんだから、紙片に返事を書いて、針でお前の背にとめておくとしませう。」

作家は机上の紙片を取つて何か書いた。そしてわざわざそれを針でもつて娘の背に縫ひとめた。

「お父様の御返事は私の背に書いてあつてよ。」

娘は上機嫌で應接間にかへつて來た。内氣な教授は後方にまはつて見た。紙片には、

「謹呈　作者より」

と書いてあつた。

運

むかし、英吉利にダヴヰット・ヒユウムといふ懐疑派の哲學者があつた。ある日エヂンバラの市街を歩いてゐる時、どうした機みか橋から滑り落ちて、沼に陷つた事があつた。馬のやうな正直者すら、偶には橋から滑りおちる事のある世の中だ。哲學者が沼にはまるのに少しも不思議はない筈だ。

ヒユウムは蛙のやうな恰好をして、泥濘のなかを泳ぎまはつた。不信心な哲學者に當てつけたやうに、その日は誰ひとり橋の上を通りかかる者がなかつた。

ヒユウムは人生問題の研究も何もかも忘れてしまつて、身體ぢゆう泥だらけになつて蹠いたが、さてどうする事も出來なかつた。

やつと時が經つて、一人の婆さんがそこを通りかかつた。哲學者は蛙のやうに沼の中から

泣き聲を立てた。

「婆さん。ちよつと手を貸しておくれ。先刻からここに落つこちて困つてゐるんだ。」

婆さんは信心深い女で、平素から教會で、人を助けるのは大層立派な行ひだといふ事を教はつてゐた。それが溝からであらうと、墨汁壺からであらうと、そんな事は同じであつた。婆さんは前屈みに手を伸ばしたが、ひよいと泥の中に立つてゐる男の顏を見ると、慌てて手を引つこめた。

「お前さんはヒユウムさんぢやないかね。」婆さんは殘りすくなの齒を狗のやうに露いて見せた。「平素神信心をしない罰だよ。いいえ、善い罰だよ。いくら助けたいにも、お前さんだと知つちや助けられないぢやないか。」

懷疑哲學者はべそを掻きさうな顏をして、婆さんに愬へた。

「まあさ、そんなに言はないで手を貸しておくれよ。私だつて神信心しないことがあるもんかよ。」

「いや、信じなさらない。その證據にはいつもマリア樣の惡口を言つてゐなさる。」

「いや、違ふよ。私は實際信心家なんだ。」

泥だらけの哲學者は、哲學が到底自分を助けてくれないものと氣がつくと、そのまま泥だらけの信心家になつてしまつた。

「それぢや、そこで羅馬教の掟を讀みあげてみなさるがいい、さうすりや助けないものでもない。」

「讀みあげるともさ。ぢや、お聽きよ。」

哲學者はビスケットのやうに乾いた唇で、うろ覺えの信仰箇條を讀みあげた。すると、婆さんはやつと安心したやうに手を出してヒユウムを引張り上げてくれた。

音樂家の大統領

共和國になりかからうとしてゐる波蘭では、その最初の大統領に洋琴家のパデレウスキイ

を選んださうだ。パデレウスキイはなんといつても今では世界切つてのピアニストで、旅行をする折にも手が硬ばるといけないからといつて、ピアノを汽車のなかに擔ぎ込んで、閑さへあれば鍵盤を打つてゐる人である。辯護士出の政治家でなければ、政治の實際が判らないもののやうに思ふのは、舊い時代の習慣に囚はれた人達の事である。世界の政治と生活との樣式が、根本から改造せられかかつてゐる今の時代には、統治者が理想家であればある程、目覺ましい國民的飛躍が成し遂げられようといふものだ。この意味においてパデレウスキイの大統領は、必ずしも不適任だとは言はれない。

墺太利の音樂家モツアルトが或る日の事、維也納の市街をぶらついてゐると、變な姿をした乞食がひよつくり眼の前に現れた。乞食は問はず語りに、色々な哀れつぽい身の上話を話し出した。すべて乞食の身の上話といふものは、聽き手が乞食でない限り、なかなか面白く聽かれるもので、話が濟むと、どんな人でもがついお鳥目をはずみたくなるものだが、生憎な事に、モツアルトはその折懷中に少しも持合せてゐなかつた。

音樂家は空つぽのポケットに兩手を突込んだまま、乞食の方へちよつと顎をしやくつて見

せた。二人は連れ立つてそこらの珈琲店に入つて行つた。音樂家は熱い珈琲と菓子の一皿とを乞食に配ひながら、自分は卓子に凭りかかつて、せつせと作曲に取掛つた。乞食が野鴨のやうな口もとをして珈琲を啜つてしまふ頃には、立派な舞踊曲の一つが有合せの紙片に書き綴られてゐた。

「あいにくと、今日は持合せが無いので、こんな物を拵へてみた。書肆へ持つて行つたら、幾らかになるだらうよ。」

モツアルトはかう言つてその紙片を手渡しした。

乞食はもう一杯珈琲が飲みたかつたのを辛抱して外へ出た。そしていくらか氣づかひながら、その紙片をそこらの書肆に持ち込むと、書肆の亭主はそれを見て、にこにこもので廿圓ばかしの原稿料を渡してくれた。乞食は物貰ひに次いでは、音樂家ほど割のいい仕事はないと思つたらしかつた。

パデレウスキイが大統領になつたら、生活に困つてゐる人達は訪ねて行つて、身の上話をしてみるのもよからう。よしんば樂譜を吳れないにしても、相手は藝術家の事だ。何か吃度

氣の利いた言葉でも聽かせてくれるに相違ない。氣の利いた言葉は、金にならないまでも、藥にはする事が出來る。

三　弗　で

罪のない子役のませた動作は、涙脆い棧敷の婦人客を直ぐ泣かせることが出來るので、横着な興行師や俳優たちは、成るべく年端のゆかない、柄の小さい子役を舞臺に立たせようとする。

波蘭生れのピアニスト、ヨセフ・ホフマンは六歳の時に初演奏をしたといふ程あつて、早熟者の多い音樂家のなかでも、とりわけ早熟の天才として名高い男だ。演奏をしに米國へ渡つたのは、確かに十歳頃だつたと覺えてゐるが、惡戯盛りの子供が、汗を垂らして難曲に夢中になつてゐる容子が餘りにいぢらしいといつて、幼兒虐待防止會から抗議の申込があつた

程だつた。

そのホフマンが（無論大人になつてからの事だ）ある時、行きつけの料理屋で晩食を食つた。勘定を濟ましてそろそろ出掛けようとすると、向うの卓子に居た五六人の客のなかから剽輕者らしい一人の男が呼びかけた。

「ちよいと、ホフマンさん。暫くお待ち下さい。」

音樂家は默つてうしろを振返つた。そこには五六人の客が居合はせたが、誰一人見識り越しの男は居なかつた。剽輕な男は卓子の上から身體を伸ばしざま、ホフマンに言つた。

「よくお待ち下さいました。別に用事といつては無いんですが、もしか私が今お呼びとめしなかつたら、貴方はどこまで眞直ぐにお出掛けになるお積りだつたんです。」

皆は聲を揃へて笑ひ出した。剽輕な男は名高い音樂家に調弄つた嬉しさに、鼻をくんくん言はせて喜んだ。

ホフマンは睫一本動かさうとしなかつた。棒杭のやうに突立つて、じつと剽輕な男の顏を見つめてゐた。そこらの卓子に居合はせた人達は、鳴りを鎭めて、この音樂家の返答を待つ

てゐた。ホフマンは靜かな聲で言つた。

「よくお呼びとめ下すつた。世界中に私が喜んで呼びとめられるのは、先づ貴方くらゐのもんでせうよ。」かう言つて、音樂家はポケットから財布を取出して見せた。「御覽の通り、ここに三弗入つてます。この金で行かれるところまで行くのでさ。」

馬の慈善

波蘭の滅亡史を讀んだ事のある者で、國士コスチウスコオの思ひせまつた苦衷に、涙を流さないものはたんとあるまい。

コスチウスコオは性來慈悲深い男だつた。慈悲深いといふのは、美しい指環のはまつた手で慈善音樂會の切符を押賣りする事を言ふのではない。場合によつたら、他人のためにその美しい手から血を流す事をいふのだ。

コスチウスコオが、ある時、隣村の僧侶さんの許へ葡萄酒の進物を贈らうとした事があつた。その使者として馬丁が呼び出された。馬丁は主人の命令で、その飼馬を引出してそれに乘る事にした。

馬丁は葡萄酒の罎を引抱へて、鞍の上で大威張りに踏ん反り返つてゐた。一體馬の尻について歩くのと、馬の背中に反りかへつてゐるのとでは、大分人生觀が異つて來るもので、馬丁は哲學書の二三冊も讀んだらしい氣取つた顏で、じろじろ附近の人を見下してゐた。

すると、街の角から貧乏人が一人のそのそ這ひ出して來て、馬の側に立つた。

「旦那、お手の内を戴かせて貰ひませう。」

馬丁は素知らぬ顏で外つ方を向いてゐたが、馬はそこに突立つて一歩も前に乘り出さうとしなかつた。で、馬丁は無けなしの財布から幾らかつまみ出して、貧乏人の掌に載せてやつた。すると、馬は納得したやうにぽかぽか歩き出した。

ものの五町と歩かないうちに、馬丁の財布は空つぽになつた。でも、馬は貧乏人と見ると立停つて動かないので、馬丁もたうとう善い事を發明した。それは何かしら、施しを吳れて

やる眞似をする事で、さうすると、馬は安心をしてまた歩き出した。

馬丁は使先から歸つて來ると、いきなり主人の室へ駈込んで來た。

「旦那、もう貴方樣の馬に乘る事だけは御免を蒙りやす。たつて乘らなければならないものなら、旦那の財布も一緒にお貸しなすつて下さい。」

コスチウスコオが貧乏人さへ見れば施しを呉れてやつたのは、別段褒める程でもないが、馬が何々伯爵夫人などと一緒に、貧民救助が好きだつたのは偉いと言はなければならぬ。馬が華族でなかつたのは何よりも殘念である。

英國首相の恐縮

英國の首相ロイド・ジョオジがまだ田舍辯護士でぴいぴいしてゐた頃、ある日訴訟用の出先から、一頭立ての輕馬車を驅つて、自宅に歸りかかつてゐた。もう半時間もしたら自分の

すまつてゐる田舍町に入らうとする頃、彼は寂しい野路で、とぼとぼと歩いてゐる一人の小娘に邂逅つた。よく見ると、同じ町にゐて、かねて見知越しの或る商人の娘だつた。

ロイド・ジョオジは車を停めて、娘をも一緒に乘せてやつた。馬は一日駈けずり廻つて、もうかなり疲れてゐるので、情深い主人の仕打を變な眼つきで見てゐた。實際娘を曳いて歸るのは馬の仕事だつたが、さうかと言つて馬が慈善家だと褒められる譯でもなかつた。從來も馬は度々そんな目に出遭つて懲りてはゐたが、それが世間だと諦めをつけてゐるらしく、默つてまた駈け出した。

未來の英國首相は、娘を喜ばせようと思つて、色々の話を持ち出した。角のある龍や、乾魚のやうに痩せた學校教師や、白鳥のお嫁になつたお姫樣や、そんな面白い話を幾つとなく聞かせたが、娘は默つて聽いてゐて、時々、「はい」とか、「いいえ」とか應答をするに過ぎなかつた。ロイド・ジョオジは變に思つて、終ひには自分も默つてしまつた。

二三日經つて、ロイド・ジョウジは娘の母親に出合つたので、その折の事を話し出して訊いてみた。

「お宅のお嬢さんは、よつぽど沈默家でいらつしやるんですね。」

「まあ、先生、その事なんですわ。」と母親は笑ひ笑ひ言つた。「娘が歸つて來て、そのお話をするもんですから、なんだつてお前そんなに默つてたんだと訊きますとね、娘の返事はかうなんですよ。『だつて、お母さん。あなたあの小父さんとお話をなさると、いつでも鑑定料とかいふものを取られていらつしやるんでせう。でも、私その折お金を一文も持つてなかつたんですもの。』と言つてね。」

牛の價

亡くなつたルウズヴェルトがずつと以前紐育州の知事をしてゐた頃、一人の百姓爺をよく知つてゐた。ル氏は毎日馬に乘つて役所に出掛けたものだが、百姓爺の家はその途中にあるので、馬に乘り飽きたル氏は、時々鞍から下りて爺さんの家で休んだりしたものだ。

ある朝、ル氏がいつものやうに馬に乘つて出掛けると、爺さんは窓に凭れて紐育の新聞を讀んでゐたが、豫て聞き馴れた馬の蹄がぽかぽかと鳴るので、眼を離して外を見た。街道には利かぬ氣の知事が、笑顏をして馬に跨がつてゐた。

「よい所へござらつしたな、旦那……」爺さんは窓から頑丈な身體を乘り出すやうにして言つた。「ちよつくら旦那にお訊き申すべいが、市の新聞つてえ奴は、えら嘘吐くだね。」

「嘘を吐くつていふのか、新聞が。」ルウズヴェルトは蟹のやうに顰めつ面をした。「なんだつてそんな事を訊くんだな。」

爺さんは窓越しに今まで讀んでゐた新聞を見せて、何處かを太い指頭で押へるらしかつた。

「私たつた今讀んだばかしだが、ここにこんねえな話が載つとるだよ。なんでもはあ、市の富豪が牡牛一匹の畫に、一萬四千弗とか拂つたつてこんだ。嘘吐くにも程があるだよ。」

「なんだつて、それが嘘なんだ。」

ルウズヴェルトは可笑しさうに言つた。馬は牡牛が法外の値で取引されたのを聞くと、なんだか面白くなささうな顏をして、頻りに瞬きをしてゐた。

「なんだつて、旦那様……」百姓は解りの遲い知事をもどかしがるやうに聲を高めた。「なんぼ廣い紐育の市だつて、まさか牛乳の搾れねえ牡牛に、大枚一萬四千弗もおつぽり出す馬鹿者はござりましねえからの。」

吝嗇の競爭

俳優中村梅玉の樂しみは、金を蓄めるのと、夕方庭の石燈籠に灯を入れてゆつくりお茶を啜るのと、この二つださうだ。尤も梅玉は石燈籠の灯を、いつまでも點燈しあかしにするやうな贅澤な眞似はしない。いい加減見て娛しむと、自分で立つて行つて、ふつと灯を吹き消してしまふ。

英國の富豪にトウマス・ガイといふ男があつた。俳優はしなかつたが、梅玉と同じやうに金を蓄める事が大變好きだつた。聖書の出版を始めて、しこたま懐中を膨らましただけあつて、かなり慈善事業にも手を出したが、聖書に書いてある事をそつくり實行もしなかつたと見えて、金はたまる一方だつた。

同じ頃ホプキンスといふ儉約家があつた。おそろしい吝嗇家で、金を蓄めるためには、どんな苦しい思ひをするのも厭はなかつた。もしか「靈魂」を銀貨一つに取替へて呉れるものがあつたら、ホプキンスは喜んで「靈魂」を賣物にしたかも知れなかつた。

ホプキンスは、英吉利中で自分ほど儉約な者は無からうと思つて、それをたつた一つの自慢にしてゐたが、人の噂に聞くと、トオマス・ガイといふ男は、自分にも劣らない程の吝嗇家らしかつた。さういふ吝嗇家がこの世に今一人住んでゐるといふ事は、ホプキンスに取つて生きがひがある事に相違なかつた。ホプキンスはわざわざガイを訪ねてみようと思つた。

ガイを訪ねたのは夜分だつた。主人は墨汁壺のやうな眞暗な部屋にもぐもぐしてゐたが、客が來たと氣がつくと、のつそり立つて行つて、蠟燭に灯をつけた。蠟燭は黄疸病みのやうな黄色い光を四邊に投げた。その瞬間ホプキンスは入口に立つて叮嚀にお辭儀をした。

「ガイさん、貴方にはすつかり參つちまひましたよ。私だつて蠟燭の儉約までは思ひつきま

せんでした。いや、有難うございました。」

ホプキンスは幾度か頷きながら、そのまゝ歸つて行つた。

勞働者としての鼠

世の中に鼠ほどうるさいものはないが、何事にも儉約な蘇格蘭のハトンといふ男は、近頃普通の家鼠を馴らして絲紡ぎをさせる事を思ひついた。

ハトンは自分の物置の隅つこから、鼠をたんと驅り集めて、色々試してみると、大抵の鼠は一日平均十一哩半は走れる。中には平氣で十八哩も走れるのがあるといふ事を發見した。

「こんな速力を持つてるものを、むざむざ天井裏ばかり駈けさせとくのは勿體ない。」

とあつて、絲を紡ぐのにそれを利用する事を考へ出したのだ。

鼠も絲を紡いでみれば、いつぱしの勞働者である。勞働者にはそれぞれ生活を保證してやらなければならぬ。ところで、鼠の餌は大分安上りで、この勞働者ひとりを丁度宜い加減に肥らせるには、四週間にざつと六錢のオートミールを食べさせればそれで十分で、その間に鼠は三百六十二哩ほど走つた。

ハトンはこの小さな勞働者を收容する紡績小屋を建てた。そして仕事に掛らせてみると、鼠はこまめに立働いて、一日に百本から二百二十本の絲を紡いだ。で、根氣よく一ケ年ほどこの工場の仕事を續けてみると、五週間に六錢の食費で鼠一匹の稼ぎ高が、廿五吋の長さの絲を三千三百五十本紡いだといふ勘定になつた。

普通の紡績職工に拂ふ割合で、鼠に賃銀を支拂ふことになると、ざつと一週間に六錢を遣らなければならないのだから、五週間に六錢の食費で濟むと、差引四週間分だけは只儲けといふことになる。で、機械や小舍の修繕などを見込むと、鼠一頭の純益が一年に三圓はあるさうだ。

畫の接吻

サアゼントといへば、女優のエレン・テリイがマクベス夫人に扮裝した、あの名高い畫の作者だと知らぬものもないが、この畫家がシヤヴンヌやエドキン・アベエなどと一緒に、ボストンの公立圖書館の裝飾畫を賴まれて、米國へ渡つた事があつた。

その折サアゼントは、ある知人の午餐會に招ばれて行つて、ひどく自分を崇拜してゐる一人の娘に出合つた。娘は食卓越しに、じつとこの畫家の姿に見惚れてゐたが、暫くするとやつと重い口を開いた。

「先生。あたし先日或る所で貴方の御製作を拜見して、覺えず繪に接吻しましたわ。」

「ほほう、なんだつてまた接吻などなさいましたね。」

畫家はいくらかお愛想のつもりで訊きかへした。

「だつて、そのなかの一人が先生にそつくりなんですもの。」

娘はかう言つて、皿のなかの櫻の實のやうに赧くなつた。

「それは有難う。」畫家はちよつと頭を下げる眞似をしたが、急に眞面目くさつた顏になつた。「そしてその畫が御返禮に貴女を接吻でも致しましたか。」

「いいえ、先生。だつて、相手は畫なんぢやございませんか。まさか……」

娘は蓮葉に額でちよつと睨めるやうな眞似をした。

「まあ、さうでしたか。そんな失禮な事を……」畫家はにやにや笑ひ出した。「それぢやお嬢さん、私にそつくりだとは言へませんよ、私だつたら……」

と、今でも喜んで接吻をしさうな顏をした。

子供の少い村

女といふものは、男の悲しみは半分分けて呉れる。喜びは倍にして呉れる。そしておまけに費用は三倍にして呉れる。――といふ程、男にとつて無くてならないものである。もしか世界に女が一人も居ないといふ事になると、それは男にとつて神様が一人も居ないといふ以上に大事件でなくてならない。

ところが、さういふ村が米國に一つある。カンサス州のエムボリア市から少し離れた片田舎だが、そこにはこの十年間がほど女の兒が一人も生れない。出來る兒も出來る兒も、やくざな石塊のやうな男の兒ばかりなので、村では地方出の代議士に頼んで、男でも女でも自由に產む事の出來る祕法を說いた書物はないものか、有るならこつそり敎へて貰ひたい。もしか無いならば、專門の學者に研究させて貰ひたいといふ、大變な陳情をしたといふ事だ。

この村には百八十二軒の家庭があるが、ここ十年がほどに生れた子供は、すべてで二百十二人で揃ひも揃つてやくざな男の兒ばかり、女といつては唯一人しかない。それがやつとまだ九つにしかならないのに、婚約の申込が降るほどあるといふ事だ。

フランシス・ウイルソンといへば米國では聞えた俳優だが、この男が或る夏の事、田舍に

旅立ちして行つた。ところが、その田舍といふのが、不思議に子供の少い村で、晝間でも遊び聲一つ聞えない、ひつそりした村であつた。（どこの國へ行つても、馬鹿と子供と雞とは騷々しいものである。）

フランシスは宿の農夫をつかまへて訊いた。

「爺さん、この村では子供は餘り居ないと見えるね。」

「居ましねえだよ、孩兒は。」

爺さんは安煙草の脂臭い口をして言つた。

「あまり生れないのかな。」

「あんまり生れねえだよ。」

「どんな割合で出來てるかしら。」

「さうだなあ……」爺さんはじつと考へるやうな目つきをした。「どの女も、どの女もが、一年にたつた一人しかよう生まねえだからの。」

食事の流儀

藤田東湖が刺身を食べるのに、いつも掌に載せてぺろりと嘗めてゐたといふ事は、いつぞやの茶話に書いたやうに覺えてゐる。佛蘭西の諺に、

「蚤を殺すには、それぞれ流儀があるものだ。」

といふ言葉があるが、蚤を殺すのに流儀があるくらゐだつたら、食事をするのにもそれぞれ儀式をもつてゐたつて少しも差支がない。

西洋料理を食べるに肉叉（フォウク）を使はないで、何もかも肉刀（ナイフ）で片づけてしまふ人がよくある。

「まあ、なんて無作法な人だらう。お行儀な西洋人に見せたら吃度笑はれてよ。」

宗教學校出の婦人だつたら、そんなのを見て酸漿のやうに顔を赧くするかも知れないが、しかし、それは物を知らないからで、お行儀な西洋人にも、肉刀で物を食べるのが少くない。

親父の大事な櫻の木を伐つて、嘘一つ吐き得なかつたジョオジ・ワシントンが先づそれで、食事をするにはいつも肉刀で濟ましてゐた。アメリカの六代目大統領ジョン・クインシ・アダムスは、國祖のそれとは違つて肉叉で食事をしたので、夫人はそれが氣がかりでならなかつたものか、お客があるときまつたやうに、

「御免遊ばせよ。宿はながらく巴里に居ましたので、つい彼地（あちら）の癖がつきましてね。」

と、言譯がましい事を言つたものだ。それが代變りになつて、七代目アンドリウ・ジヤクソンになると、またワシントンなみに肉刀で皿を啄つき出した。

越後の良寛上人が、ある時濃茶の席へ招かれて行つた事があつた。どんな場合にも無頓着だつた上人は、上客から茶碗を受取ると、一息になかの濃茶を口に含んでしまつた。だが、その一刹那、自分の次にもまだ一人客のゐる事に氣がついて、今飲んだばかりの茶を、また茶碗のなかに吐き出して次へ廻して來た。

客は茶碗を受取つた。そして低聲で、

「南無阿彌陀佛……」

と念佛を唱へながら、眼をつむつてぐつと一息に嚥み下した。客が何のために念佛を唱へたかは私の知つたことではない。

農夫の自慢

米國のダコタ在生れの農夫が、最近英國へ旅をした事があつた。農夫といふものは、蚯蚓のやうに土地にこびりついてゐるだけに、えて在所自慢をしたがるもので、この農夫も豫て顔馴染の英吉利の農夫を見ると、すぐに生れ故郷の自慢話を持ち出したものだ。

「かう言つたつて、眞實(ほんたう)にはさつしやるまいがね、俺達の耕地ちふのは、素晴しく大(でか)いもんでね……」ダコタ生れの農夫は厚い唇をもぐもぐさせながら言つた。「春の初めに鍬を入れかけて、畦を眞直ぐに耕作を濟ますのは、丁度秋のかかりだよ。歸り途にはそろそろもう收穫(とれ)をせんならんほど作物が大きくなつとるだよ。」

「そんな事もがすでせうな。」英吉利生れの農夫はわざと落着き拂つて言つた。「俺の友達が一人印度に居るだが、なんでもその話によると、向うでは畑を抵當(かた)に借金をしようちふんで、持地をぐるり一廻り檢分して歸ると、もう借金の返濟期になつとるので、いつまで待つても金の借りやうが無えちふ事だよ。ははは……」

二人は聲を揃へて笑つた。暫くすると、ダコタ生れの農夫は少し笑ひ過ぎたやうに急に眞面目な顔になつた。

「そんだら、はあ、丁度俺が娘聟の持地とおつつかつつだと見えるだね。」農夫は面(めん)と向ふ折にはこつぴどく面當(つらあて)を言はないではおかない同じ口で、自慢さうに娘聟の噂をはじめた。

「俺が娘聟ちふのは、二週間前に結婚しただがね。その翌る朝馬車に乘つて牧場に出掛けたもんだ。毎日毎晩持地のなかをとつ走つて、やつと牧場に着いた頃には、もう子供が二人生れとつただよ。」

英吉利の農夫はちよつと頭へ手をやつた。そして何かそれにも負けないやうな法螺を考へてゐたらしかつたが、たうとう考へつかないで、感心したやうに深い溜息をついた。——嘘

のやうだが、これは近刊の英字雜誌に載つてゐる全くの事實談である。

何故食物が高い？

米國ではこの頃食料品が高くなつたので、あつちこつちで頻りと不平の聲が聞えてゐる。先日も前大統領のタフトが田舍へ旅行して、途中で道連れになつた農夫を相手に、近頃農產物の値段が箆棒に高くなつた事を話して、

「まるで以前の三倍もの値段がするのだからやりきれない。」

と、こぼした事があつた。そして相手の農夫が値上げの張本人ででもあるかのやうにじつとその顏を見つめた。

農夫は象のやうな大きな圖體のタフトを見返しながら、濟まなささうに頭を搔いた。實際食料品がかう高くなつては、一番困るのは馬か、タフトかのどちらかに相違なかつた。

「でも、お前樣。小麥が高くなつたのは、小麥自身が高くなつた譯ぢやござりましねえだよ。」

農夫は言譯がましく口を切つた。「あれはその、學問の値段が入つてるからでござります。今時の農夫はお前樣方と同じやうに、いろんな事を知らなくつちやなりましねえからの。」

「學問の値段といふと——」タフトは腑に落ちなささうに眉を顰めた。「そんなものが、なんだつて小麥や馬鈴薯の値段に影響して來るんだね。」

「だつて考へて御覽じませ。」農夫は節高な頑丈な手をタフトの鼻先で振廻した。「今の農夫は往時と違つて、自分達の畑から上る物の植物學とやらの名前をも知らなくつちやなりますめえ。それからいろんな害蟲だが、そんねえな無益物の昆蟲學とやらの名前をも覺えなくつちやなりますめえ。その上に肥料の化學的成分とやらもすつかり頭に入れておかなくちやなりましねえのだからな。なんだつてお前樣、それにはみんな錢がかかりまするだよ。」

「さうか……」

と言つて、タフトは解つたやうな解らぬやうな顏をして、そのまま默つてしまつた。

肉代五弗也

米國の華盛頓であつた事――ある日、土地で名高い判事のKといふ男が、豫て顔馴染の肉屋の店先を通りかかると、でつぶり肥つた店の主人が、いつもの愛嬌笑ひをしいしい、

「ちよつと……」

と言つて呼びとめた。

判事は立ちどまつた。肉屋の主人といふのは、いつも剽輕な世間の噂を聞かせてくれるので、大抵の場合その店先で立ちどまつても損はしなかつた。

「お呼びとめして相濟みませんが、ちよつと旦那に伺ひたいと思ひやしてね。」肉屋の主人は輕く頭を下げた。「肉を盗まれましたのは、法律上どんな手續をしたもんでがせうな。」

「肉を盗まれたのか。それは告訴しなくちやならん。うつちやつとくと、癖になつていかん

からね。」

判事は肉の事なら、値段からビフテキの味加減まで、法律でどうにでも出來ると考へてゐるらしかつた。

「まつたく癖になつていけやせん。」肉屋の主人は二三度輕く頷いた。「ところが、盗んだ奴が人間ぢやないんで困つてしまひやす。」

「人間ぢやない。なんだね、それでは。」

「狗兒なんでげす。」

「狗兒だつて、そんなら飼主から肉代を辨償させるまでの事さ。」判事は何でも彼でも法律で押し通したいらしかつた。「そんな狗兒を飼ふなんて怪しからん事だ。」

「ところが、旦那。その狗兒つてえのが、お宅の斑なんでげす。」

肉屋の主人は氣の毒さうに揉み手をしながら言つた。

「宅の狗兒か。」判事はだしぬけに途の眞中で鼻を抓まれたやうな顔をした。「それぢや仕方がない。盗まれた肉代は幾らだつたね。」

「お氣の毒さまですね。五弗でげす。」肉屋は叮嚀に頭を下げた。

判事は捩ぢ曲げたやうな笑ひ方をしながら、懐中から五弗取出して、肉屋に拂つた。

それから二三日すると、肉屋の店に、件の判事から支拂請求書が來た。主人はけげんさうな顔をして封を切つた。なかには、

牛肉盗難事件
鑑定料五弗也
右請求候也

と認めてあつた。肉屋の主人は舌打ちをして五弗を支拂つた。

愛國心の胃の腑

獨逸の鐵血宰相ビスマルクが、ある時ウイルヘルム老帝の御馳走になつた事があつた。その折の獻立がどんなだつたかといふ事は、他人の食膳にあまり興味を持たない私の知らない事だが、唯一つその時卓子の上に載せられてゐた酒が、三鞭酒だつたのはよく知つてゐる。

ビスマルクは自分の洋盃につがれた三鞭酒に唇をやつた。その唇は自分の戀女房に接吻する外には、いろんな國の外交官を相手に嘘ばかしを言つてゐたが、それでも酒の味はよく判つたものだ。ビスマルクはちよつと洋盃の緣を嘗めると、覺えず眉の上に太い皺をよせた。

ビスマルクは手を伸ばして、卓子の上に置かれた三鞭酒の壜を引寄せた。こんなにまづくてゐて、平氣で帝王の食卓に上つてゐる酒壜が、どこの出來だかちよつと見て置きたかつたのだ。酒壜は白い手帛で包んで、わざとレッテルを隱してあつた。ビスマルクは眼をあげて老帝の顏を見たが、その一刹那、老帝が石版畫のやうな眞面目な顏をして、じつと宰相を見かへしてゐるのに氣がついた。

「陛下。ちよつとお伺ひ致しますが、この三鞭酒はどこの產でございます。」

ビスマルクは手帛に包まつた酒壜をさしながら訊いた。

「どこのでもない。」老帝はいつに似ぬ堅い調子で返辭をした。「わが獨逸國で出來たのだ

よ。」

「道理で、ひどくまづいと思ひました。」

ビスマルクは獨言のやうに言つて、英吉利生れの婦人でも見るやうに、馬鹿にした眼つきでその酒壜を見た。

「まづいかも知れん。」老帝は唇の端に心もち微笑を浮べた。「だが、朕は愛國心で酒を飲むといふ事を知つとるからな。」

老帝の皮肉に宰相も默つてゐなかつた。

「あいにくと、私の愛國心は胃の腑の入口でとまつてをりますので。」

名文句

米國のボストンにペン先の製造業者がある。數多い同業者を壓倒して、店のペン先を賣り

弘めようとするには、なんでも廣告を利用する外には良い方法が無かつた。で、一千弗の懸賞附で、ペンに關する獨創的な名文句を募集する事にきめた。

懸賞附の廣告が發表せられると、方々から應募原稿が山のやうに集まつて來た。整理係が汗みづくになつて、それを取調べてゐると、なかに一通大判な用紙に、劍先で書いたかと思はれるやうな大きな文字で、

「ペンは劍よりも偉大なり。」

と認めてあるのがあつた。そして御叮嚀に附箋までして、

「ちよつと都合がありますから、懸賞金は電報爲替でお送り下さるやうに。」

と、添へ書がしてあつた。

整理係はそれを見て、ちよつとからかつてみたくなつた。で、早速手紙を出して、貴方の應募原稿は素晴しく立派に出來てゐるが、あの名文句が貴方の獨創であるといふ證據さへあつたら、懸賞金は直ぐにお屆けしようと言つてやつた。

すると、折返して返事が來た。一體直ぐに手紙の返事をよこす人には神信心の厚い、正直

者が多いものだが、この應募者も察する所、正直者だつたに相違ない。返事にはかうあつた。

「私の送つた文句は、私が何處かで讀み覺えたものか、それとも自分の頭から出たものか、はつきりとは申上げられません、然し私は今日まで本といつては、國民讀本と舊約聖書の箴言しか讀んだ事がありませんから、この二つの本に無い文句なら、私の拵へたものとして差支ない筈です。重ねて申します。懸賞金を折返し電報爲替で送つて下さい。」

だが、笑つてはいけない。この應募者は讀本と箴言と――書物を二冊も讀んでゐる。書物を二冊も讀むといふ事は、日本では贅澤の沙汰だとしてある。

馬は美容に害あり

今朝の新聞紙を見ると、若い女が馬に蹴られて死んだといふ事が載つてゐる。氣の毒な事だ。だが、注意しなければならないのは、馬は女を蹴飛ばすのみならず、その上に女を不縹

緻にさへすることである。蹴飛ばされて息が絶えるくらゐならまだ辛抱も出來るが、不縹緻にまでされては迚も堪つたものではない。美しいといふ事は、生命があるといふ事以上に大切なのを思ふと、馬は男と一緒に女にとつては目の敵である。

伊太利のヴェニスには美しい女が多い。世界中のどこの都に比べても、美しい女にかけては決して負(ひけ)を取らない。何故ヴェニスに限つて、そんなだらうと理由を訊いてみると、醫學者の返事は極くはつきりしてゐる。それはヴェニスは音に名高い水の都で、馬が居ないからださうだ。大抵の都會では、ざつと十分おきには吃度荷馬車ががたぴしと地響きをさせて通るものだ。騷々しいその物音は、人に厭な氣持を起させるばかしか、安眠を妨げる事が夥しい。安眠は何よりも容色を美しくするものだといふ事を思ふと、荷馬車の音も聞かないで、ぐつすり眠る事の出來るヴェニス女の美しいのに、なんの不思議はない筈だ。

米國の或る女學校で、生理の教師が、安眠は何よりも健康の藥だと言つて聞かせると、生徒の一人が立ち上つて質問をした事がある。

「先生。人間は一體幾時間ほど眠つたらいいんですの。」

先生は嚴つべらしく答へた。

「男子が六時間、女子が八時間、そして馬鹿者が十時間。」

女生徒は嬉しさうに叫んだ。

「いいわ。私女でゐて、おまけに馬鹿だから、これから十八時間眠る事にするわよ。」

その小娘が世界中の一番縹緻よしだつたかどうかは、私も知らない。

獨身主義者

アメリカにジオウジ・エエドといふ獨身主義の文士がある。そのエエドが或る時知合の結婚式に招かれて、列席した事があつた。

側にゐた近眼の某夫人は、エエドの顔を眼鏡越しにじろりと見ながら言つた。

「エエドさん。貴方は今だにお獨りでいらつしやいますが、御結婚なさるよりも、その方が

道德的だと思つてらつしやるんですか。」

「いえ、どう仕りまして。」獨身文士は皮肉な眼つきで夫人を見かへした。「私の經驗によりますと、獨身でゐる男は、結婚した男よりも確かに人が悪いやうですね。」

「貴方もさう思つてらしつて。まあ、皆さん、お聞きなすつて、今のを。」

近眼の夫人は、勝ち誇つたやうに、居合はす夫人達の顔を見比べた。皆は急に蠟燭をともしたやうに明るい晴れやかな表情をした。

「エエドさん。」と一番年嵩らしい婦人が呼びかけた。「貴方がそれ迄に懺悔なさいますには何か理由がおありでせう。聞かせて戴けないこと……」

「お安い御用です。」エエドは洋盃の飲物にちよつと唇をあてながら言つた。「何故といつて、奥さん、女房持ちの男が怖がるのは、たつた一人の女ですが、獨身者は女全體を恐しがるんですからね。」

梅の下かげ

出雲松平家の茶道に、岸玄知といふ坊主が居た。ある時松江の市街外れをぶらついてゐると、穢い百姓家の垣根に花を持つた梅の樹が目についた。梅は大隈侯のやうに年齢で、おまけにまた大隈侯のやうに杖に凭りかかつてゐたが、玄知はその姿が氣に入つたので、早速百姓に掛合つてみると、百姓は幾らか貪つた價を切り出した。

玄知は家に歸つて、これまで持ち慰んだ茶道具の幾つかを賣拂つた。そして金子を懷中にいそいそと百姓家を訪ねて行つた。取引が無事に濟むと、玄知は腰にした瓢をほどいて、花の下で酒を飲み出した。百姓が夕方外から歸つてみると、玄知は花の下で狗ころのやうに鼾をかきながら轉寢をしてゐた。

それから幾日か經つたが、玄知は一向樹を持ち運ばうともしないで、毎日のやうにやつて

來るので、百姓は不思議でならなかつた。

「旦那。一體あの梅の樹はどうして吳れるだね。」

「どうもしないよ。あのままさ。」玄知はけろりとした顏をしてゐた。

「だつて、お前樣、高い金出して、俺がの買取つたぢやねえか。」

「さうさ、買取るには買取つたが、うちは邸が狹いから、いままで通りお前の許に預けておくつもりだ。」

百姓は、麥飯と水とで出來た自分の哲學では解き難いものに出會したやうに、頭へ手をやつた。

「預かれなら、預かりもしようがの、實が生つたら持つて行くだかね。」

「いや、實は要らない。」玄知はその梅の實のやうな圓い頭を振つた。「乃公は花を見ればいいのだ。實はお前に吳れてやるから、精々樹に氣をつけてやつてくれ。」

「實は要らねえだつて。」百姓は眼を見張つて不思議な茶道の顏を見た。「俺實が生るから金を貰つただ。花見するだけなら、お前さんが幾度來たつて彼是叱言いふ俺でねえだ。金は返

すだよ。」

百姓が金を取りに家へ歸らうとするのを、玄知は遽てて引きとめた。

「いや、止しにして呉れ。花がお前のものなら、いくら見たつて面白くない。自分のものにして初めて熟々と見てゐられるのだから。」

百姓は自分の知らなかつた珍しい嘘でも聞かされたやうに、胡散さうな表情をして首を振つた。

將軍の舅

遣歐米軍の司令官パアシング將軍の舅は、今米國のワイオミング州にゐる、地方切つての富豪である。州の首府シヤイエンにだけでも、四十六軒の家作を持つてゐる。それがいづれも素晴しく立派なものづくめである。

そのシヤイエンの市街に、一人の老つた小學校の校長が住んでゐる。長い一生を振返つてみても、何一つ碌な事は仕出來してゐないので、この頃では他と話す時には、いつもパアシング將軍の舅を自慢する事にきめてゐる。名高い將軍を娘聟に持つたばかりか、しこたま財産をさへ持つてゐる、なんといふ幸福な男だらうと言つて。

ある時友達がこの老校長を訪ねて來た。校長は市街をぶらつきながら、途々將軍の舅の自慢話を持ち出した。すると、道の曲り角で大きな旅館の前に出た。校長は慌てて友達を引きとめた。

「見なさい。この建物も將軍の舅さんの所有でさ。」

友達は旅館の高い窓を振仰いで感心した。

市街を曲ると、そこの通りには幾つかのかつちりした會社向きの建物が立ち並んでゐた。こんな街に事務所でも置いて、株券の利廻りでも考へてゐたら、定めし氣持がよからうと思はれた。校長はその前に來ると、慌ててまた友達を呼びとめた。

「見なさい。この建物もみんな將軍の舅さんの所有でさ。」

「いい湖水だ。誰のだらう。やつぱり將軍の舅さんの所有なんですか。」
「さあ。」老校長は行詰つたやうに頭へ手をやつた。「いや、あの方のぢやなからう。多分神様の所有でがせうよ。」
「神様の……成程ね……」と友達は皮肉な眼で校長の汗ばんだ額を見た。「神様の所有にしても、いづれは將軍の舅さんからお買取りになつたのだらうが、どのくらゐお支拂ひになつたかしら。」

魚を食ふ人

天龍寺の峨山和尚が、ある時、食後の腹ごなしに、境内の池の畔をぶらぶらしてゐた事があつた。池には肥えふとつた緋鯉だの眞鯉だのが、面白さうに戯(ぎ)けあつて、時々水の上へ躍り上るやうな事さへあつた。

次の街では、小ざつぱりした住宅向きの建物が幾つとなく目に留つた。こんな住居に入つて、家賃もきちんきちんと拂つて、おまけに結婚しないで濟まされるものなら、この世は天國だらうと思はれた。校長はその前に來ると、また立ちどまつて言つた。
「見なさい。この建物もそつくり將軍の舅さんの所有でさ。」
暫くすると、二人の目の前に、宏莊な、素晴しく金のかかつたらうと思はれる建物が現れた。
周圍には美しく刈り込まれた芝生があつて、色々の珍しい花が咲いてゐた。友達は校長を振向いて訊いた。
「立派な家ですな。誰方の所有ですか。」
「これですかい……」校長は自慢さうに鼻を動かした。「これが、その將軍の舅さんの宅でさ。」
そこから少し行くと、美しく鏡のやうに光つた湖水があつた。白い雲の一片が立ちどまつて女のやうに自分の姿をうつしてゐた。友達は景色に見惚れながら訊いた。

峨山和尚は立ちどまつて池のなかを覗き込んだ。世捨人の和尚の身にとつても、納所坊主の他愛もない談議を聽いてゐるよりか、鯉の戯けるのを見てゐる方がずつと面白かつた。和尚は夢中になつてじつと見とれてゐた。すると、だしぬけに後から、

「和尚さん。」

と呼ぶ聲が聞えた。

和尚はうしろを振向いてみた。そこには近所の惡戯つ兒が一人衝立つてゐた。

「和尚さん。あの鯉一尾わてにおくなはらんか。」

子供は今和尚の目の前で水をうつてとんぼがへりをした大きな鯉を指ざしながら言つた。

「ならん、ならん。」和尚は木の株のやうな頭を振つた。「この鯉はみんな飼うたるのやさかいにな。」

「そない言はんと、一尾だけおくなはらんか。和尚さん。」

子供は嬌へたやうに和尚の袖を引張つた。和尚は笑ひ笑ひ袖を引離した。

「いや、ならん、ならん。鯉を捕るのは殺生やよつてな。」

子供はわざと戯けたやうに、指先で和尚を突つく眞似をした。

「そない言うたかて、和尚さん、自分でこつそり捕づてはる癖に。」

和尚は眼を圓くして子供の顏を見入つたが、それでもどうと言ひ解くわけにはいかなかつた。

ベンヂヤミン・フランクリンは、僧侶さんのやうに菜食主義で暫く押し通して來たが、ある時、何かの折に魚を料つてみたことがあつた。すると、その魚の腹から小魚が二三尾出て來た。

「なんだ、魚め、仲間同士で友食ひをやつてるんだね。」フランクリンは腹の底から吃驚してしまつた。「そんなだつたら、何も遠慮するんではなかつた。」

それからといふもの、彼はふつつりと菜食主義を止めて、魚を食べ出した。そして鯉のやうに肥り出した。

婦人の病氣

醫者の診察室には、病人も來れば健康な人も來る。醫者は一々それを診て、病人には病氣でないやうな氣安めを、健康な人には病氣があるやうな言葉をかけなければならぬ。それが出來ないと、その診察室は兎角評判がよくない。

英國にジョン・アバアネシイといふ名高い外科醫があつた。長らく聖バアソロミウ醫院に勤めてゐたが、物言はずの沈默家と不作法なのとで聞えた男だつた。ある時若い貴婦人がこの醫者の診察室に入つて來た。婦人の手首はちよつと腫れ上つて熱を持つてゐるやうだつた。醫者は碌に診ようともしないで、ぶつきら棒に訊いた。

「熱りますか。」

「づきづき痛むんですわ。」

貴婦人は美しい眉を顰めながら言つた。

「罨法なさい。」

醫者は一言言つたきり、立ち上つた。貴婦人は不安さうな眼つきをして歸つて行つた。

次の日、婦人はまた診察室に入つて來た。醫者はじろりと横目で睨んだ。

「癒りましたか。」

「いいえ。昨日よかなほ悪いやうですわ。」

貴婦人は狆ころのやうに悲しさうな目つきをした。

「もつと罨法なさい。」

醫者はさう言つたまま、この美しい患者を置いてきぼりにして外へ出た。

それから二日目にまた貴婦人が診察室に入つて來た。今度は打つて變つて、世界が花びらになつたやうな笑顔をしてゐた。醫者は訊いた。

「癒りましたか。」

「はい、お蔭ですつかり快くなりました。」

婦人が象牙のやうな手首をつきつけるのを、醫者は見向きもしなかつた。

「なんでもなかつたんだ。貴女の神經からだつたんです。」

鼠に嚙まれた英雄の心臓

獨逸の軍隊が、佛蘭西の國境深く入り込んでゐるにつけて、巴里っ子は、なんぞと言つては大ナポレオンを思ひ出してゐる。ナポレオンを思ひ出すにつけて、またしても繰返されるのは、この英雄の心臓の話である。

心臓の話といふのは外でもない。――忘れもせぬ、一八二一年五月、この英雄の死骸が棺に納められようといふ時、側にゐた一人の軍醫は馴れた手際で死骸から心臓を切り離した。軍醫は切り取つた心臓を洋盃のなかに入れて、卓子の上においた。多くの軍人の血と、多くの美人の涙にも、平氣で堪へる事の出來た心臓は、透き徹つた硝子の底で蛙のやうに顫へ

てゐた。軍醫はこの心臓にお通夜をするつもりで、じつと洋盃のなかを見つめてゐた。

ふと硝子の碎ける音がしたので、軍醫は吃驚して眼をあけた。知らぬ間についうとうとと居睡つてゐたものらしい。見ると、床に落ちて粉々に碎けてゐる洋盃の側を、大きな灰色の鼠が血だらけな英雄の心臓を咥へて、小走りに逃げのびようとしてゐる。

ジョセフインの柔かい手でも、英國海軍の大きな力でも、どうする事も出來なかつた英雄の心臓を、鼠はたつた一口に頬張つて、そのまま逃げ出さうとしてゐるのだ。軍醫は猫になつたやうな氣持で、慌てて鼠に飛びかかつた。實際尻っ尾の持合せがあつたら、軍醫はそのまま猫になつたかも知れなかつた。

軍醫はやつと心臓を取返す事が出來た。鼠が吐き出した英雄の心臓は、失戀でもしたやうに所々破れてゐたさうだ。

「實際吃驚したよ。でも、まあやつと取返したがね……」

軍醫は後々になるまで、なんぞと言つては、その夜の話をしたものだ。

だが、噂によると、取返された心臓は、ぐちやぐちやに嚙み潰されてゐるので、それをナ

ボレオンの心臓だといつて、神様の前に差出すわけにもいかなかつた。で、軍醫はこつそり羊の心臓を切り取つて、それを酒精漬にして、銀の壺に密封したまま、棺のなかに納めたのださうだ。

名女優の冷笑

劇は一人で出來るものではないから、俳優達の互ひの呼吸が合ふといふ事が何よりも大事である。先年道頓堀で仁左衛門と鴈治郎との顔合せ興行があつた。兩優とも若盛りで人氣を爭つてゐる間柄だつた上に、出し物は假名手本忠臣藏で、仁左が師直、鴈が判官といふ役割なので、雙方の贔員々々は兩棧敷に分れて、めいめい好きな俳優のために大袈裟な力添へをしたものだつた。

派手好きな鴈治郎は、刄傷の場で思ひきり派手な演じ方をして、舞臺を巧く引つ浚へて行

かうと註文をつけてゐたらしく、眞青に鯱子張つて舞臺へ出た。すると、案外なのは相手の仁左の師直で、これはまた糊氣のぬけた皮肉な、いつもの型とは打つて變つた冷いやり方なので、鴈治郎の判官は刀へ手をかける事も出來ないで、大弱りに弱つてしまつた事があつた。

英吉利の名女優エレン・テリイが、ひと頃氣難しやで聞えた或る男優と一緒に舞臺に立つてゐた事があつた。男優は幕がすむと、例の氣難しい顔をして樂屋へ入るなり、相手のテリイが大事の正念場だのに、自分の顔を見てにやにや笑ひ續けてゐるので、舞臺がだれて芝居がしにくくて仕方がないと言ひ出した。

「いやに名優面をして、人の舞臺を見下すやうな笑ひ方をしやがる。一度思ふ樣油を取つてやらなくつちや。」

彼はたうとう同じ劇場にゐる女優あてに手紙を持たせてやつた。手紙にはこんな文句があつた。

「こんな事を申上げるのは、全くお氣の毒でたまりませんが、私は貴女がいつも舞臺で私の方を御覽になつて笑つてばかりゐられるので、芝居がしにくくて仕方がありません。あれで

は全く打毀しです。どうかこれからは、あそこが正念場だといふ事をお考へになつて、貴女の態度を變へていただきたいのです。」

エレン・テリイはその手紙を見たが、相變らずにやにや笑つてゐた。そして次のやうな返事を書いた。

「それは貴方のお穿き違へですよ。私は舞臺でなんか貴方のことをちつとも笑ひは致しません。笑ひたいんですけど、宅へ歸るまで堪へてるんですよ。」

バルザック

佛蘭西寫實派小說の開山バルザックは、隨分たんと小說を書いたが、それだけではまだ書き足りないで、脚本の方へも足を踏み出さうとしてゐた。ある時友達と二人巴里の大通りを歩きながらこんな話をした。

「僕も一つ脚本でも書いて、うんと金儲けをしようかな。なに、本さへ出來上つたら、請合つて百五十回くらゐは舞臺に上せて見せるさ。一回の上り高がざつと五千法(フラン)として、百五十回で七十五萬法、そのなかから脚本料に十二パアセントを取るとして、少くとも八萬法にはなる筈だね。」

バルザックは胸算用をしながら、寢不足さうな眼をあげて、じつと友達の顏を見た。友達はお附合ひに調子を合はせた。

「なるほど、さう聞けばさういふことになるね。」

「さう聞けばぢやないよ。實際さうなるんだよ。」とバルザックは大きな頭を振つた。「この外に劇場以外から入る收入が先づ五千法。それから脚本一冊の賣値が三法として、三萬部でざつと……」

「もう判つた、判つたよ。」

友達は手をふつた。

「ほんとに結構な話だから、どうかその中から三法だけ今貸してくれたまへ。」